【別添　解説資料】

大滝周辺の鉱山と青葉学園の創設

はしがき

「青葉学園」と称する児童養護施設が戦後間もない頃、大滝集落から６㎞も山奥の旧茂庭村蛇体（現在福島市飯坂町茂庭）に開設されたという大滝会HP情報は驚きで俄（にわか）には信じがたいことであった。大滝集落の記録誌『わが大滝の記録』（昭和52年1月）にも言及がなかったし（『PDF』版には大滝会HP管理人紺野文英氏により追記されている。H26.9.6)、現在福島市内土船にある社会福祉法人「青葉学園」の前身にあたるというのも初めて聞いた話しであった。創設された場所がかつての銅鉱山跡というのも意外で、名前だけは聞いたことのあった蛇体鉱山や大滝集落とも関わりの深い中野鉱山とも関係があったということも大変興味深いことである。

ところで鉱山の開発や青葉学園の創設は、少し大袈裟に云うと万世大路（明治期初代、昭和期２代目）の建設に伴う整備効果の一つではないかと考えられるのである（いわゆるストック効果)。われわれ万世大路フアンとしては、福島･米沢間の交通路が開かれたという直接的効果もさることながら、いろんな方面で役に立ったことの証としてこの鉱山開発や青葉学園の創設を位置づけることが出来るのではないかと思った次第である。鉱山にしても発見は藩政時代（江戸時代）とも云われているけれども、本格的に開発採掘されたのはやはり万世大路開通後であろう。青葉学園が、閉山した鉱山の事務所跡等を利用して開設されたのも万世大路が整備されていたからこそであったと思われる。そこで関連する鉱山のことや青葉学園について次に紹介する文献などを基に整理しておきたいと思う。

【参考】ストック効果

道路の整備効果として「道路整備の際の財政支出が有効需要を創出して国内総生産（GDP）の増加等をもたらすというフロー効果（需要創出効果）と、道路が建設された後にその本来の機能から発生する**ストック効果**（生産力拡大効果）」（『道路行政』平成21年度、677頁）があるとされる。

フロー効果としては、例えば工事を実施することにより直接的短期的に雇用や消費（資材）が発生し経済活動が拡大する。またストック効果としては継続的中長期的に、直接的には各個人の走行経費（燃料など）の節約があり、間接的には例えば工場立地など地域開発の誘導、公益施設等の整備により沿道土地利用の促進などが計られ、また輸送コストの低減により物価を低下させること等がある。

鉱山関係の情報については『わが大滝の記録』と大滝会役員皆様からのヒアリングによるもののみであったけれども、『福島県鑛産誌』（昭和40年3月、福島県企画開発部開発課、以下『鉱産誌』と略記）という公的な文献の存在を知り（Webサイト「街道Web」管理人TUKA氏）それまで分からなかった基本的な情報を得ることができた。また青葉学園については同園のホームページ･大滝会HP･「街道Web」等からの情報であったがこちらについても『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』（平成8年6月、社会福祉法人青葉学園、以下『50年史』と略記）という書物のあることを知り（Webサイト「山口屋的文化ＭＥＮ類学」管理人山口屋散人氏）青葉学園創設の経緯等について詳しい情報を得ることができたものである。

第1. 大滝周辺の鉱山について

大滝周辺の鉱山としては、蛇体鉱山（茂庭鉱山）・八百沢鉱山・烏川鉱山・大滝鉱山・長老沢鉱山・中野鉱山・末松鉱山がある。本節では、蛇体鉱山と中野鉱山･長老沢鉱山･大滝鉱山を中心に、大滝会の方々のヒアリング結果も加味して整理するものである。

最初に、大滝集落の記録誌『わが大滝の記録』（PDF版、20頁）に述べられている「鉱山ブーム」という一文を紹介しておきたい（PDF版は大滝会HP管理人紺野文英氏による追補版）。

年月を明確に伝える記録のないのが残念であるが、古老の話しによると、宿場街時代もとうに去った明治30年代の終りの頃から大正の始めにかけて、中野鉱山、蛇体鉱山、大滝鉱山(葭沢)などが相次いで採堀操業されて、大滝を中心にちょっとした鉱山ブームが訪れたことがあった。中でも大滝鉱山の発見者*三ッ石三平（光石三平）は浮浪の身から一獲千金をかち得て話題をさらったと云う。場所は吉田富三郎氏宅の川向いで、話しによると銅鉱石が露出し、純度も非常に高く、加えて発掘、運搬に便利だったため、大きな利益をあげた。しかし鉱床は極めて浅く埋蔵量が少なかったため、そう長くは続かなかったらしい。

注 * 三ツ石三平（光石三平）… 公式文書「福島県鉱産誌」昭和40年(1965)県企画開発部発行で光石が正しいことが判明した（H26.09.05にTUKA氏発見）

この頃吉田氏宅では鉱山労務者のために万頭を作って売っていたため、後の世まで通称万頭屋で通っていた。大滝山神神社の社屋は、この時代に鉱山成金*光石三平によって造営寄進されたものと伝えられている。

また*蛇体鉱山について、操業していた時代は蛇体鉱山から胡桃平まで蛇体道を牛に牽かせた土橇で鉱石が運搬され、西川橋の袂に鉱石の集積所が在ったとの伝聞が残っている。また、「すえまつ(末松)鉱山」の鉱石も同じ場所に集積されたとの伝聞も有るが、「末松鉱山」の場所や詳細は定かでない。

***蛇体鉱山の正式名称は茂庭鉱山･蛇体坑…公式文書「福島県鉱産誌」より**

蛇体鉱山と大滝鉱山が鉱床の薄さから早期に閉山に至っているなか、中野鉱山は幾多の紆余曲折（閉山･再開など）を経ながらも昭和39年頃まで操業が続いた。……中野鉱山は藤田財閥(藤田組)の系列会社である藤田鉱業(昭和2年～)、(昭和32年同和鉱業と合併)が経営していた。その後、昭和33年にはやはり関連子会社の卯根倉鉱業に経営が移行し昭和39年の閉山迄続いた。

***中野鉱山出身者遠藤常男氏証言 平成29年9月**

（閉山理由は昭和32年頃から昭和37年の銅価格下落で不採算になった為 ***同上遠藤常男氏証言**）

中野鉱山関係の職員や鉱夫の子供達は大滝分校で大滝集落の子供達と一緒に教育を受けており、現在(平成25年)でも大滝集落出身者との交流が継続している。

***(H25年6月追記, H29年9月追記訂正 紺野文英)**

次に『鉱産誌』（87～89頁）からの抜粋と筆者による解説文を記す。

（1）蛇体鉱山（茂庭鉱山）

われわれが「蛇体鉱山」と通称しているのは、下記に示すようにその位置関係から云っても福島県の行政当局が「茂庭鉱山」として分類している所のようである。その中に「蛇体坑」という採掘

坑道はあるけれども全体を総称する「蛇体鉱山」という名称は『鉱産誌』には見当たらない。しかし、地元大滝の方が昔から「蛇体鉱山」と言い習わし親しんでいる名称なので、「茂庭鉱山」という名称は用いず本稿においては引き続き「蛇体鉱山」を用いることとする。

【茂庭鉱山（蛇体鉱山）】（以下『鉱産誌』から抜粋）

鉱　　区　採掘204号

鉱業権者　石部泰三

所 在 地　福島市飯坂町（旧伊達郡茂庭村）茂庭

福島市から米沢市に至る国道万世大路に沿って約16㎞の大滝部落（原文は「大橋部落」となっているが誤植であろう）から、さらに海抜700m前後の峠（クビト峠、標高約730mのことであろう）を越えて北方６㎞の烏川上流山中にある。

付近は主として片状花崗岩と一部結晶片岩からなり、鉱脈はN30°～50°E (*1) に貫く石英・黄銅鉱・鉱脈で70°NまたはS (*2) に急斜する。中でも金山沢新坑は幅0.5m～2.0m以上と認められ、また、例えば次の品位を有する。

鉱　　床	金（g/t）	銀（g/t）	銅（%）
栄坑露頭	1.4	19	8.0
蛇体坑直り (*3)	1.0	20	21.0
作坑主脈	3.0	1,120	12.5

(*1)　鉱脈面と水平面の交わる交線の方向＝走向を示す。ここでは、北から30～50度東にずれていることを示している

(*2)　鉱脈面の傾斜を示すもので北（または南）の方向に70度傾斜していることを示す。かなりの急傾斜で坑道は斜坑になっていると思われる。

(*3)　直り：鉱床の中で特に品位の高い部分。富鉱体（広辞苑）。

本鉱床は百数十年前、上杉領時代の発見にかかり明治37年肥田累之助氏開山、同40年渡辺某氏、同42年清水四郎氏ほか２名により売鉱、同42年多田豊吉氏、後独人オットライメスを経て、大正５年石部泰三氏ほか１名によって採掘開始、同９年まで品位10%以上の精鉱数千ｔを出したが休山。昭和14年さらに川瀬留吉氏によって稼行（鉱物を産出すること）されたが、交通不便のため休山している。

（ルビ、注書き筆者、以下同じ）

【参考】上杉領時代

1598年（慶長3年）1月～1664年（寛文4年）6月。慶長3年1月上杉景勝会津120万石を襲封（領主になること。福島･信夫郡伊達郡含む）。慶長5年（1600年）関ヶ原の合戦は徳川家康が勝利し、豊臣方となっていた上杉米沢藩は、会津90万石を失い米沢･福島30万石に減封され上杉景勝は慶長6年11月米沢に入っている。その後、寛文4年（1664年）6月、米沢藩は30万石から15万石へ減封**（寛文の削封）**、これにより米沢藩は信夫･伊達郡（他、宇田郡玉野村、置賜郡屋代郷）を幕府に収公されて失った。

寛文の削封：米沢藩３代藩主上杉綱勝が嗣子もなく末期養子の手続きをする余裕もなく寛文４年閏５月７日(1664年６月30日)27歳の若さで急逝した。本来上杉家廃絶となるところ、３代将軍家光の実弟、義父保科正之（綱勝正室故媛姫の父、４代将軍家綱の補佐役、大老格）の奔走もあり 30 万石の半領の措置 15 万石減（領地伊達郡・信夫郡等召上）で米沢藩 15 万石（置賜郡）は存続することとなった。綱勝の生母生善院の養子として高家筆頭吉良上野介義央の嫡男三郎（上野介の正室、綱勝の妹三姫の子、綱勝の甥）が４代藩主綱憲となった（寛文４年６月相続許可）。

〔以下　筆者記〕

この蛇体鉱山（茂庭鉱山）については、その名称の記載はないけれども、明治41年地形図（旧陸地測量部）に採鉱地として図示されている。『鉱産誌』では、金山沢新坑がいつの時代のものか判然としないけれども、「新坑」と云っているので最終稼行の川瀬氏時代のもののように思われる。また、金山沢についてどこを指しているのか、大滝の方も聞いたことがないということで、その具体的な場所は不明であるが少なくとも３箇所の坑道現場（鉱脈）で採掘がおこなわれていたのであろう。この内の蛇体坑というのが地元大滝の方も実際に見ている烏川沿いにあった坑道跡と思われる。その場所が字蛇体（あざじゃたい）（蛇タイ）であることから蛇体坑と称していたと思われるし、これらの鉱山を「蛇体鉱山」と通称するようになった所以（ゆえん）であろう。

川瀬時代は昭和14年（1939年）からで、以前の鉱山が大正9年（1920年）に休山しているようであるから約20年ぶりの再開となる。青葉学園が利用した鉱山事務所･飯場跡というのは、川瀬時代に新（あらた）に設けられたものと思われる。その状況について「飯場の建物を買ったのであるが、以前は人夫が大勢寝泊まりしていたわけであるから建物はたくさんあった。しかし雪のため大部分が傾いたり、つぶれたりしていて、使える建物はごく一部であった。その中では事務所だった建物がしっかりしていたのでこれを教室と住まいにした」と『50年史』は述べている（23頁）。このことから蛇体鉱山の規模は結構大きなものであったことが推察される。

川瀬氏が休山した時期は『鉱産誌』では分からないけれども、『50年史』によると「……中野村青葉谷（通称蛇体）に三年前まで銅を採っていたという貧鉱の廃屋がある」（70頁）とある。この引用文は昭和21年7月に青葉学園（昭和21年6月開所）を訪れた福島民報の高橋重夫記者のリポートである（昭和21年7月16日付け福島民報記事「新国字生み出す山奥に――文化の闘志」社会面ほぼ全頁）。従って、蛇体鉱山は昭和18年くらいまでは稼行（鉱物を産出）していたと思われ、終戦近くまで採掘していたという大滝の方の証言もあるのでほぼ間違いがないであろう。従って建物類もまだ使えるものがあったということになる。

この鉱山について「……蛇体という所は、ドイツ人某が銅の鉱脈を発見した銅山だった」と『50年史』（22頁）が述べており、『鉱産誌』の上記引用にあることとほぼ一致する。当時建物の売買などで旧鉱山関係者と接触があったと思われるのでそんな折にでも得た情報かも知れない。

なお、蛇体鉱山に関して戦後の動きは直接伝えられていないけれども、どのような理由か大滝（長老沢）から蛇体に至る通称蛇体道の砂利敷補修工事が（延長 4,350m、幅 2.5m）S26.11.15～S27.3.31 にかけて実施されているところで、若干重複するが鉱山関連として以下に再整理しておく。戦後昭和 24 年に通商産業省は鉱業成立の基盤を安定させるとして鉱業政策の基本構想を決定しているが、その中に既存鉱床の調査等も含まれている（JOGMECweb サイト『銅ビジネスの歴史』2006.8.1）。蛇体鉱山の閉山は、上記引用の『鉱産誌』によれば鉱脈の枯渇によるものではなく交通が不便なためと云っているので、再開に向けて鉱床調査をするために道路を補修した可能性はあるだろう。再開が可能な有望鉱脈であれば、蛇体道は鉱山道路としてもそのまま利用出来る（再開されなかったので国際価格に見合った採算のとれる鉱山ではなかったのであろう）。

冒頭各鉱山を列記している中で「末松（すえまつ）鉱山」というものがあるけれども、これは『鉱産誌』の中には見当たらない。その鉱山の位置は、蛇体道の旧中野村側のほうにあると大滝会の情報である（大滝側（福島側）から約2.0km付近の赤松原生林の中）。恐らく「茂庭鉱山」の一部だったのではない

かと推測する。

(2)文殊鉱山(八百沢鉱山)

【文殊鉱山(八百沢鉱山)】(以下『鉱産誌』から抜粋)

所 在 地　福島市飯坂町（旧伊達郡茂庭村）茂庭

前記茂庭鉱山から烏川に沿って下流約３㎞、文珠山（標高849ｍ）の北西峡底にある。明治の末に八百沢鉱山として稼行され、昭和の中頃再び文殊鉱山として操業されたが、北方梨平部落から山道８㎞の山中にあるため開発が容易でない。

〔以下　筆者記〕

この文殊鉱山（八百沢鉱山）については、八百沢鉱山の名称で明治41年地形図（旧陸地測量部）に採鉱地として図示されている。

(3)烏川鉱山

【烏川鉱山】(以下『鉱産誌』から抜粋)

所 在 地　福島市飯坂町（旧伊達郡茂庭村）茂庭

文殊鉱山に隣接し、片状花崗岩中をＮ55°　Ｅに貫く鉱脈で、大正５年松崎富美氏が稼行したといわれる。

(4)中野鉱山

中野鉱山は、大滝周辺の鉱山では最大のものと思われ遅くまで稼行されていたものである。閉山時期は詳(つまび)らかでなかったが少なくとも『鉱産誌』発行年の昭和40年3月（昭和39年度）頃までは操業していたことは確かであり、上記『わが大滝の記録』によると昭和39年（1967年）頃までは稼行していたようである（旧通商産業省の鉱業関連統計誌でも後日確認）。また、蛇体鉱山と共に青葉学園と関連のある鉱山でもある。

【中野鉱山】(以下『鉱産誌』から抜粋)

鉱　　区　採掘463号

鉱業権者　卯根倉鉱業（株）

所 在 地　福島市飯坂町（旧信夫郡中野村）朴沢

飯坂温泉町の西北方10㎞、福島･米沢間を結ぶ国道筋にある。地質は古生層に属する砂岩およびこれを貫く花崗岩からなる。鉱床はほぼ東西性の数条の平行脈で、鉱石は黄銅鉱を主とするが、少量の雲母鉄鉱(うんもてっこう)・閃亜鉛鉱(せんあえんこう)ならびに黄鉄鉱(おうてっこう)が随伴し、鉱脈上部では二次鉱物として班銅鉱(はんどうこう)･輝銅鉱(きどう)･銅藍(どうらん)等が存在する。おもな鉱脈を表記すれば下表（1、4号鍾、銅沢鍾のみ略記例示）のとおりで４号鍾が主脈である（鍾：「ひ」と読む、古い鉱山用語で鉱脈、鉱床の意)。

鉱床名	坑口からの距離	走向	傾斜	鏑幅	品位
１号鏑	317m	N65° E	75° S	10cm	銅2% 金0.3ｇ/ｔ 銀13ｇ/ｔ
４号鏑	378m	N75° E	80° N	25cm	銅8% 金0.3ｇ/ｔ 銀30ｇ/ｔ
銅沢鏑	1,310m	N80° E	70° N	10cm	銅2% 金0.3ｇ/ｔ 銀13ｇ/ｔ

（注） 鉱床：1号鏑（１号鉱脈）～７号鏑（7号鉱脈）、笹の平鏑、銅沢鏑の９箇所（本稿ではうち３箇所のみ例示）。

鏑幅：鉱脈の幅。

坑口からの距離：零番坑の坑口から当該鉱脈までの距離。中野鉱山の零番坑とは通洞坑のこと（通洞坑：山麓または山腹からほぼ水平に掘削された坑道で主要な運搬坑道のこと。排水、通気にも使用される）。

本鉱山の歴史は古く、文化･天保の間に伊達藩において稼行されたと伝えられる。明治41年三有鉱業（株）の所有となり、大正元年には通洞坑（現零番坑）を開さくし、大正７年頃は産額が最も多かったといわれるが、大正11年には休山した。昭和2年4月藤田鉱山（株）の手に帰し、３号鏑の着鉱をみた。昭和30年4月にはディーゼルコンップレッサー（ディーゼルエンジンの空気圧縮機、空気を圧縮して押し出す装置）を設置して探鉱･採鉱を行なった。この間、４号鏑・５号鏑・６号鏑・７号鏑に着脈し、設備の拡充、生産の増大を行なったが、昭和32年4月銅価の下落、品位の低下によって採掘を中止し、もっぱら探鉱に意を注ぎ１号鏑・３号鏑下部の探開を行なった。昭和32年10月同和鉱業（株）に合併され、新たに卯根倉鉱山（株）の発足（昭和33年１月）に伴い同会社の傘下に入り現在にいたっている。この間、零番坑４号鏑から立坑掘下り一番坑（－20ｍＬ）を開坑し、地並以下（前記当該一番坑坑道の存する地中面から下の意）の４号鏑・３号鏑・１号鏑を確認した。昭和34年1月には浮遊選鉱場（鉱石から鉱物を選別する装置、浮遊選別はその一方式）を建設し、同年3月から操業が開始された。さらに鉱脈下部の探鉱は継続され、昭和36年度以降４号脈の下部に富鉱体（鉱床の中で特に連続して品位の高い部分、直り）が発見され、鉱況は大きな進展を見ている。近年の生産量は次表に示した（昭和28年度～昭和36年度の表示があり本稿ではその一部のみ例示、昭和33年は休山）。

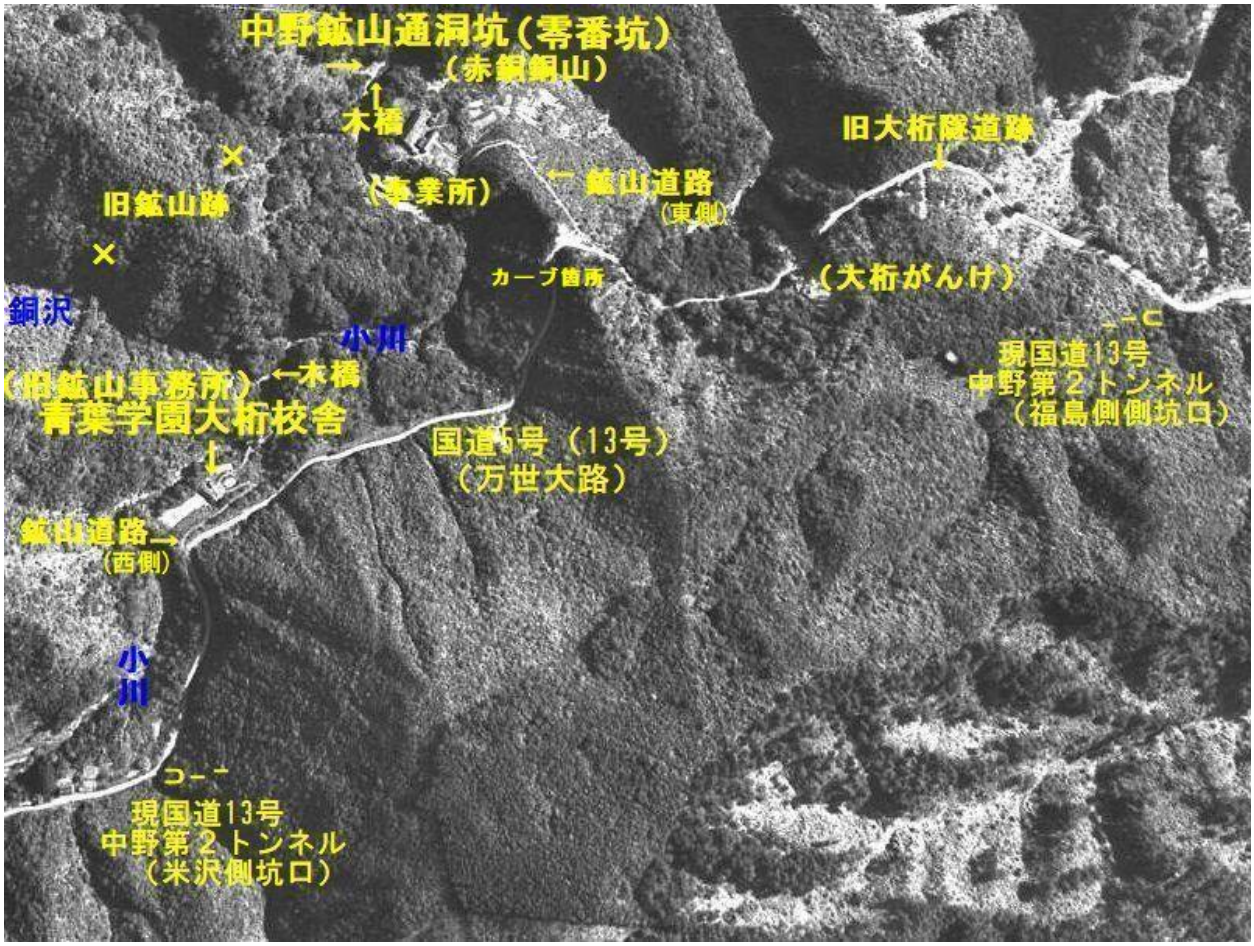
年次	生産量（銅鉱石）	品位		
昭和28年	516t	金 —	銀 —	銅 9.6%
昭和30年	1,246t	金 —	銀 129ｇ/t	銅 6.9%
昭和31年	1,785t	金 —	銀 100ｇ/t	銅 7.4%
昭和36年	515t	金 0.4ｇ/t	銀 26.3ｇ/t	銅 29.3%

〔以下　筆者記〕

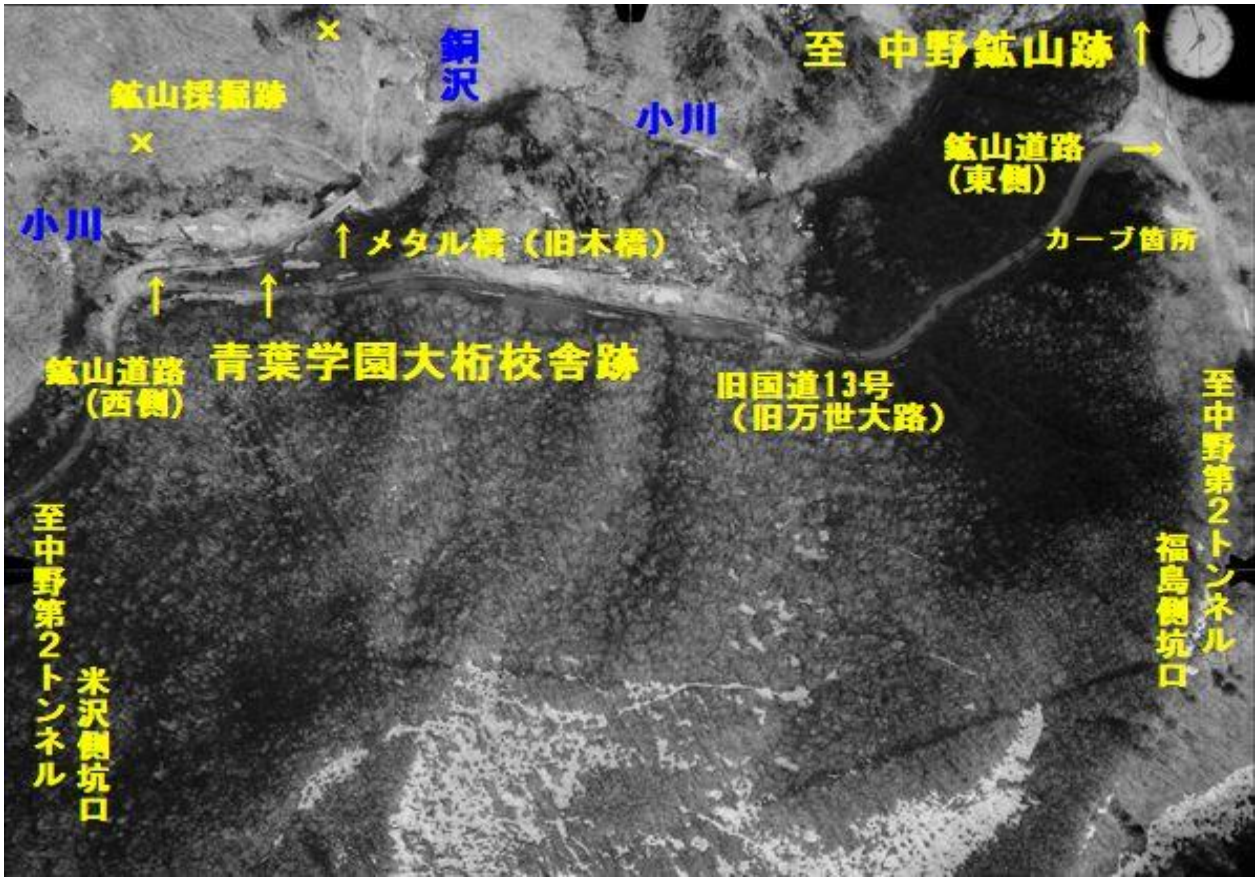
中野鉱山の坑道（通洞坑･零番坑）位置

中野鉱山の位置については、大桁地区小川上流の西側鉱山道路橋梁（木橋）付近の左岸銅沢付近とのイメージでいたものである（明治期5万分の１地形図の当該箇所に採鉱地･図示）。その場所で銅鉱の採掘がおこなわれたことは間違いないようであるけれども、近年の主脈は各種情報を総合す

ると別の場所であることが判明した。しかし、その位置を明確に示す文献資料は手元になく確定的な位置を示せないのが残念である。大滝会木村義吉会長はじめ役員の皆様からの聞き込みや紺野文英大滝会HP管理人による中野鉱山関係者からの情報、『50年史』のスケッチ図面（83頁）、また戦後昭和23年6月に米軍によって撮影された空中写真等を参考に推定すれば次のようになろう。現国道13号中野第2トンネル（L=789m）の北側（小川側）に残る旧国道（約１㎞相当区間）の中間付近に大きくカーブする箇所がありその福島側から北側（小川方面）に向う鉱山道路（東側）が設けられていて、その先（終点）の小川の右岸には建物が建てられており、中野鉱山（通洞坑）の坑口はその対岸（左岸）の川岸から数m程度の位置にあったようだ。旧国道からはせいぜい200mくらいの位置であろう。当該箇所の小川の低い場所に木橋が架けられていてそれを渡って行くという（大滝会談）（**【参考写真－1①②③】、【写真－1①】**）。



【参考写真－1①】　昭和 23 年 6 月　青葉学園大桁校舎・中野鉱山通洞坑空中写真（米軍撮影）。
国土地理院提供（一部加筆）　H230608



【参考写真－1②】　昭和 41 年 3 月　青葉学園大桁校舎跡付近空中写真。S41.3.12　国土地理院提供（一部加筆）

【参考写真－1③】　昭和 23 年頃、青葉学園大桁校舎と中野鉱山関連図
青葉学園様提供
一部加筆（『50 年史』）

【写真－1①】　旧中野鉱山を望む。 現国道 13 号中野第 2 トンネル米沢側旧道分岐箇所から約 200m付近大桁地区。右側が旧国道（万世大路）で鉱山道路はその奥。
旧鉱山跡は中央山あいにある（位置は推定）。H240506

現地は小川が渓谷状になっていてその崖のすぐ上には建物の布基礎（コンクリート製の帯状の土台）が数多く残存している。基礎で囲まれている面積の広いところは、おそらく会社の現地事業所（中野事業所）のように思われ、狭いものは住宅であろ

う。樹木が繁茂していて対岸の坑道跡や橋の位置などは確認できなかったけれども、たまたま現地で出会ったキノコ取りしていた男性によると対岸に確かに鉱山跡があり見たことがあると話してくれた（坑道は埋められているとのこと）**【写真－1②～④】**。

【写真－1②】　旧国道 13 号（万世大路）鉱山道路入口を福島側から望む。写真奥カーブ箇所。　H240506

【写真－1③】　鉱山道路　北側（事業所方面・小川）を望む。 H290916

【写真－1④】　旧国道 13 号（万世大路）から約 200 m付近（小川渓谷崖の上）、建物の遺構あり。事業所跡か、比較的広い建物の布基礎。付近には住宅用の布基礎跡が広範囲に残存。H290916

戦後昭和20年後半にその坑道を数10mほど進入した経験があるという大滝会の方もおられる。ご記憶によれば坑道はほぼ水平で、幅･高さ共２m以上あり、両側には素掘りの側溝があって水が流れていたけれども、その水は飲めないと教えられたという。トロッコの線路もあったような記憶があるという。坑道のこのような特徴から、いわゆる通洞坑のようで零番坑と呼ばれていたものと考えられる。通洞坑については前記しているが、山麓または山腹からほぼ水平に掘削された坑道で主要な運搬坑道のことを云い、排水･通気にも使用されるものである。その通洞坑の先でそれぞれの鉱脈（例えば4号鍾、銅沢鍾など）に至る坑道（斜坑や立坑）が掘削され鉱石を採堀する。『鉱産誌』に記載されている大正元年に開削された通洞坑（零番坑）のことであると思われる。

ところで、当時中学生くらいだった大滝会の方々は、坑内より搬出され木橋右岸に集積された鉱石から土石類を除いたものをカマス（藁（わら）で作った大きな袋）に入れ背負って結構な坂道を上って旧国道まで運んだという。その坂道は、いわゆる鉱山道路（東側）のことであると思われるが、旧国道からは下り坂になり10分もかからず木橋まで着いたそうである（現地でも確認した）。鉱山道路は、幅3m以上、延長は約200mで勾配は平均的に約10％程度ではなかろうか**【写真－1③参照】**。

運んだ鉱石は、トラックが来てどこかへ運んで行ったということである。昭和34年2月には浮遊選鉱場が現場に建設されているが、昭和20年代には別の場所にある選鉱場まで運搬したものであろうか。その坂道（鉱山道路）が取り付く旧国道箇所から約100m先（福島側）には、かつて「大桁がんけ」（がんけは「崖」の方言）と云われた当時の国道5号（のち13号）の難所があった。現在こ

の「がんけ」は約100mに亘り崩壊していて不通となっている。平成6年（1994年）10月、『50年史』編纂の為現地調査に訪れた青葉学園スタッフによるとこの頃には既に不通になっていたようだ（前掲書81頁）**【参考写真－1④、③参照】**。

【参考写真－1④】　大桁がんけ崩落箇所約 100m、福島側から望む。写真奥電柱箇所は旧国道（万世大路）当該箇所から約 100m先が鉱山道路入口。H160417　dark―RX 様提供

なお、文中の「鉱山道路」という名称は当時の正式名称ではなく、報告を進める上で分かり易くするために便宜上筆者が独自に使用しているものであることをお断りしておく。

中野鉱山のその銅山の名称は「赤銅（あかがね）銅山」（『50年史』83頁・384頁、**参考写真－1③参照**）となっているようだが、大滝会の方は通称「アカガネ」と云っていたようで、上記引用の『鉱産誌』の中にはその名称はなく「赤銅（あかがね）」というのは銅を意味する言葉であるから銅鉱山を一般的な意味で「赤銅銅山」（アカガネ）と地元の方達は呼んでいたのかも知れない。従って、青葉学園の関係者も鉱山名を「赤銅銅山」と認識されていたと思われる（青葉学園の頃は休山中のようで「赤銅銅山跡」と図示している『50年史』384頁）。

〈青葉学園大桁（おおげた）校舎と鉱山関連施設について〉

ここで、若干先走るけれども関連するので後に述べる青葉学園大桁校舎と鉱山に関係する付近の状況についてここで触れておきたい。それには、『50年史』に掲載されているスケッチ図面が中野鉱山関連も含めその状況を良く伝えているので参照されたい（83頁、**【参考写真－1③参照】**）。現国道13号中野2トンネルの米沢側坑口から旧道が北側に分岐していて100m程度福島側へ進んだ所には鉱山道路（西側）が設けられていて、道路をさらに進むと旧国道下に中野鉱山関連の建物があったようだ（**【写真－2①～③】【参考写真－2①】**）。

【写真―2①　】　現国道 13 号中野第 2 トンネル米沢側から旧道に 100mほどの地点。旧鉱山道路（西側）は前方橋脚（朴沢大橋）の辺りが入口だったと思われる。H290916

【写真ー2② 】 写真左側現在の青葉学園大桁校舎跡への下り口。校舎跡は直ぐ下。右側は復元された旧万世大路（旧国道 13 号）、福島側を望む。 H290916

【写真ー2③ 】 旧万世大路（旧国道 13 号）から青葉学園大桁校舎跡を望む。旧国道沿いには芒（ススキ）が繁茂【参考写真ー1③参照】。写真手前が鉱山道路で右に行くとすぐに残存橋梁遺構がある。 H290916

『50年史』では「飯場の建物を買取った」（79頁）とあるが、事務所風の感じがするので本稿では「旧事務所」と表現しておく。下流の通洞坑箇所（対岸）の建物（中野鉱山事業所）とは別である。戦後間もなくは、中野鉱山は休山中であったと思われるが、「青葉学園」が蛇体から引越しして来て使用した（昭和21年（1946年）10月～昭和23年10月、2年間）その旧事務所のすぐに下は小川（おがわは河川名、１級河川阿武隈川左支川摺上川（すりかみがわ）の右支川）がカーブしているところで小さな滝（小川滝、オガ滝と地元の方は云っている）があり銅沢という左支川が流入している。当該箇所の小川には当時木橋が架かっていて対岸（小川の左岸）に渡ることができたそうである**【参考写真ー2②】**。後には、鉱山関係者のジープが度々渡っていたというからメタル（鉄）橋に架け換られたと思われる（**【写真ー2④】【参考写真ー1②参照】**）。

【参考写真ー2①】 青葉学園大桁校舎（旧鉱山事務所）（S21.10～S23.10、2 年間）青葉学園様提供 昭和 22 年頃（『50 年史』）

【参考写真－2②】 木橋（上流側・鉱山道路（西側））
青葉学園様提供
昭和 22 年頃（『50 年史』）

【写真－2④】 旧木橋箇所、小川右岸側メタル橋
残存遺構（橋台部）。
見にくいが鉄骨が残っている。
H290916

橋を渡ると左右に道路（鉱山道路）があり『50年史』のスケッチ図面（83頁、**【参考写真－1③参照】**）によれば鉱石採掘の跡（複数）があったようだ。大滝会の方もかつて鉱山跡を確認されている。前述のキノコ取りの男性も現在橋の跡（残存物）があるところの対岸で鉱山跡を見たと言っていた。明治41年地形図においては銅沢筋右岸に採鉱地記号が記載されており、中野鉱山の早い時期（明治期）から当該箇所で採鉱されていたことを示すものであろう。対岸の小字名が「旧中野村字銅（どう）」となっており沢の名称も「銅沢（どうさわ）」で、江戸時代から銅が産する場所として知られていたと思われる。しかし戦後においては、小川左岸の当該箇所では採掘がおこなわれていたかは不明である。ただ、橋がメタル（鉄）橋にわざわざ架換られて鉱山関係者が渡っていたことを考えると鉱石を採掘していた可能性もあろう。本橋は後に撤去されたものと思われるが、当該道路が林道ではなく鉱山道路であったからであろう（林道橋であれば現在も存続しているはず）。

中野鉱山が戦後再開してからの従業員宿舎は、その「赤銅銅山」付近と「青葉学園」付近の2箇所にあったそうで、従業員の子弟が中野小学校大滝分校へ多数通学していたということである。

中野鉱山の稼行（始まり）

『鉱産誌』には、鉱物の種類について各種列記されているが詳細についてはわかりかねるけれども、いずれもほとんどが銅鉱石のことで黄銅鉱が主な産出物であったようである。

さて、中野鉱山の稼行開始の時期について「伊達藩」時代とされているが旧中野村が伊達藩（江戸幕府下）に支配されていたことはない。文化（1804～1818年）～天保（1830～1844）年間は、旧中野村は幕領（徳川幕府直轄領）時代で伊達藩による鉱山稼行はないであろう。旧中野村は、上杉

藩時代（1598年（慶長3年）～1664年（寛文4年）の後幕領となったけれども、一時本田忠国・福島藩15万石領（延宝７年（1679年）6月～天和2年（1682年）2月）となる。このあとは再び幕領となって明治維新を迎えている。この間、福島には堀田氏10万石（貞享３年（1686年）～元禄13年（1700年））、板倉氏3万石（元禄15年（1702年）以降明治維新まで）が福島藩として成立しているが、旧中野村は引き続き幕領のままであった。

なお、旧中野村は中世以降戦国大名伊達氏の支配下にあったが、伊達政宗（独眼竜）の会津葦名氏攻略や小田原遅参による豊臣秀吉の奥州仕置、その後の大崎葛西一揆鎮圧（戦国大名大崎義隆・葛西晴信の旧領、現在の宮城県大崎市や岩手県胆沢郡等での旧家臣団等の反乱、天正18年（1590年）10月～同19年7月）の不手際などにより、天正19年（1591年）9月伊達家（政宗）支配から離れ（伊達政宗、岩出山へ転封）、蒲生氏郷の支配下となった。その後氏郷の死去に伴い子秀行が慶長3年1月、会津92万石から宇都宮18万石に減封となり、その後に上杉景勝が襲封（会津120万石）して上杉領となったものである（『ふくしまの歴史』などより）。

中野鉱山ではないが文化2年（1805年）には、旧中野村銅屋に銅鉱脈が発見され採掘されたが４年で休山（文化4年）しているという（『福島の町と村Ⅰ』471頁）。この際に、或いは中野鉱山の銅鉱床も発見され『鉱産誌』の記述となったものか、或いは混同されて伝えられたものであろうか。

実は、場所は中野鉱山を指していて異なるけれども採掘時期はそれと全く同じ時期となる文献もある。『明治天皇御巡幸録』（福島縣教育會 昭和11年10月）に収録されている『福島縣輦道驛村略記』（明治14年調原文の儘）の還幸輦道（明治天皇のお帰り道、栗子隧道から御泊行在所福島醫学校まで）の各要所の説明の中に「礦山」として次のような記述がある。

「本道（万世大路のこと）左字銅（原文鋼とあり誤植と思われる）山にあり、文化二年發見銅を採堀す、同五年より廢坑に屬す（廃坑になった）、鑛質美也し（良質銅鉱石）と言傳ふ。」

いずれにしても幕藩時代に中野鉱山が稼行されたことは確かであろう。そして明治時代にも稼行さていたと考えられる。それ以降の稼行状況については前記引用本文にある通りで、大正元年に水平坑（通洞坑）を掘削し本格的に採掘されているようである。戦前の休止時期、戦後の再開時期等については詳らかでない。

中野鉱山の閉山と銅鉱業の若干の歴史

次に中野鉱山の閉山時期について記す。戦前戦後とも休止期間はあるが、最終的に閉山したのは中野鉱山関係者によれば昭和39年のようである。戦前においては推測であるが昭和18年頃までは稼行していたと思われ、戦後は昭和24年頃再開したと考えられる。以下、日本の銅鉱業の歴史を若干繙きながら中野鉱山が閉山に至った経緯について整理してみた。

日本の金属鉱業は、日露戦争（明治37年（1904年）2月～明治38年9月）、第１次世界大戦（大正3年（1914年）7月～大正７年11月）を通じ国内市場の拡大と海外市場の好況によってその規模を急速に拡大したが、戦後（第１次世界大戦）恐慌により長く不況に見舞われることとなった（1929年10月世界大恐慌勃発）。しかし、満州事変（昭和6年（1931年）9月～昭8年5月）を契機とする軍需産業の発展により金属鉱業は活況を取り戻した**【写真－3①②】**。

【写真一3①】　銅製軍需品。上段三八式歩兵銃薬莢と弾丸、中段　機銃弾丸、下段　ピストル弾丸（いずれも推定）。福島市内信夫山防空壕跡から出土。 筆者所蔵

【写真一3②】　三八（さんはち）式歩兵銃と銃弾。写真右下は擲弾筒（てきだんとう）。旭川市北鎮記念館　H280901

これは、高橋是清大蔵大臣（4度目）による景気対策（軍事費の膨張と土木工事の実施・低為替による輸出促進、いわゆる高橋財政の発動、昭和6年12月）が功を奏したものであった。またおりから銅鉱山においては、戦時体制強化のため拡充、旧鉱山の復活がおこなわれ、昭和15年のアメリカなど欧米諸国による鉱石等の対日禁輸を受け国内資源の徹底的な開発増産がおこなわれた。戦前の銅生産量ピークは昭和18年である（81,000ｔ）。しかし、乱掘による鉱況の悪化を齎（もたら）し終戦直前銅鉱山は衰退した。

終戦直後から昭和22年半ば頃までは、日本の鉱業は未曾有の混乱荒廃状態にあり、また終戦時には大量の鉱産物の在庫が存在し、生産条件の悪化（インフレ、資材欠乏、労賃の引き上げ等）と相まって新規鉱業生産を困難にしていた。昭和21年・22年の銅供給は、旧軍部の放出銅や兵器処理による再生材等が大部を占めていたという。

昭和23年の後半には鉱工業生産も次第に回復し、昭和24年には通商産業省が鉱業成立の基盤を安定させるために鉱業政策の基本構想を決定し、新鉱床探査補助金制度を設立するなどの具体的施策を実施した。新鉱業法も制定されている（昭和25年12月20日公布、昭和26年1月31日施行）。

国による国土のインフラ整備も始まり電力・通信施設復興により銅需要（電線など）も伸展、朝鮮戦争が勃発（昭和25年（1950年）6月～昭和28年7月）すると銅は軍需品として国際需要が増加した。この特需により銅輸出が増加し戦後の鉱産物滞貨が一掃された。昭和31年の神武景気もあり、国内鉱山は鉱山の再建・近代化にも取り組み生産高を増加させ、昭和32年（81,700t）には昭和18年の戦前ピークを超えた。昭和33年（1958年）には神武景気の反動で景気が悪化し（なべ底景気）銅需要・価格の低下を招いた（中野鉱山休山年に一致）。昭和33年後半からは「岩戸景気」（～昭和36年）といわれる景気上昇期に入り停滞期を含むが昭和49年の第1次オイルショック前の昭和48年まで経済成長が続き（高度成長期）銅需要も伸び続けた。

ところで戦後日本の産業は、為替管理と輸入制限のもとに外国との競争から保護され発展してきたが、めざましい我が国の経済発展にともない欧米先進諸国から貿易・為替の自由化が求められてきた（昭和34年（1959年）10月東京開催、GATT輸入制限協議会）。これら貿易の自由化は、昭和35

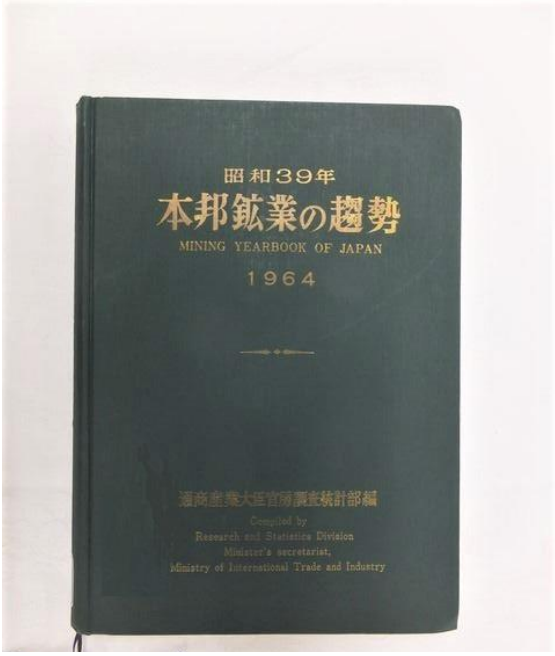
年6月決定の「貿易為替自由化計画大綱」に基づき国際競争力をつけた品目から順次実施された（非鉄金属類は昭和38年4月実施）。当時の国会（第40回通常国会昭和37年5月6日）は、国際競争に極めて弱い国内地下資源産業は貿易自由化により壊滅的な打撃を受ける恐れがあるとして所要の施策を実行するよう決議している。その結果実際に金属鉱業の体質改善を図り国際競争力を強化するための諸施策が実行されている。貿易自由化の結果、銅価格は低落、大企業鉱山（日立鉱山など）は合理化を進め国際競争力を強化し存続したが、コスト引下げが進まず閉山した鉱山も少なくなかったと思われる。中野鉱山も昭和38年4月の貿易自由化の実施により価格競争力を失い昭和39年に閉山したものと考えられる（後述）。昭和40年3月に発行された『鉱産誌』によれば、4号鏑（4号鉱脈）では富鉱体（銅含有量の多い有望鉱脈）が発見され鉱況が進展すると記述されているので、鉱脈の枯渇による閉山ではないことは明らかである。

我が国の鉱山は、鉱脈型鉱床の地表露出部を発見し、地下に掘り進んでいくという鉱脈型鉱山が多い。その代表的な足尾鉱山はやがて鉱脈が枯渇し昭和48年2月に閉山し、昭和61年には花輪鉱山（日本鉱業）が閉山して鉱脈型鉱山による生産は無くなった。また、黒鉱型銅鉱山（黒鉱は複数の金属を含む鉱床）は秋田県内を中心に開発されてきたが平成6年（1994年）3月に花岡鉱山（同和鉱業）が鉱量枯渇で閉山し、日本の銅鉱山は消滅した。銅は、江戸･明治･大正時代を通じ日本の代表的な輸出品目であり、17世紀後半から18世紀前半までは、日本は世界１位の銅生産国であったと推測されている。現在、日本ではほとんど銅が生産されていないということについて筆者は寡聞にして知らなかった不明を羞じるばかりであるが誠に寂しい限りである。県内有数の銅山であった中野銅山についてその存在の証をその歴史と共に何らかの形で伝えられるべきであると思う。

（以上、JOGMEC Webサイト『銅ビジネスの歴史』(2006.8.1）を参考に整理した。

【参考】

旧通商産業省の鉱業関連の統計情報誌『本邦鉱業の趨勢』（通商産業大臣官房調査統計部編、毎年発行）の中に中野鉱山関連の記事を見つけたので、関連の統計資料と共に参考までに下記に示す（福島県立図書館所蔵、昭和26年～昭和48年、一部欠落年あり）。また『本邦鉱業の趨勢50年史』（前掲編、明治38年～昭和35年）も参考にした**【写真－4】**。



【写真－4 】　旧通商産業省の鉱業関連統計誌「本邦鉱業の趨勢 昭和 39 年」福島県立図書館 所蔵 H290913

①卯根倉鉱業（株）中野事業所の閉山について

「鉱山事業所名簿」（昭和39年･40年のみ掲載、それ以外は「企業名および事業内容」の一部として略記）銅鉱業欄によれば、昭和40年版まで中野事業所が掲載されているけれども、昭和41年版以降には掲載されていない。昭和40年版では「休（山）」となっており名簿に掲載されている前年の39年までで閉山したことを意味するものであろう。従って、前述の中野鉱山関係者による昭和39年閉山が公的文献で確認されたこととなろう。

事業所所在地の住所は「福島県福島市飯坂町中野大桁一」となっている。青葉学園大桁校舎の住所は

「同　大桁三」となっている。このことから、事業所の位置は中野鉱山通洞坑（左岸）の対岸（右岸）にあった建物群の中の一つではないかと考えられる**【写真－1④参照】**。通洞坑側にあったという建物は現場事務所の類いではなかろうか（こちら側の住所は中野字銅になる）。

なお、中野事業所は従業員規模49人以下の最小規模Ａランクと名簿上はなっている。

② 銅鉱山数と生産量、従業員数の推移（全国）

貿易由化は昭和35年（1960年）10月から徐々に実施され、非鉄金属（銅）の貿易自由化は昭和38年4月から実施された。その昭和38年（1963年）前後の銅鉱山数と生産量､従業員数の推移（全国）を下記に示す。

区　　分	昭和35年	36	37	38	39	40	41
銅鉱山数	141	126	102	92	79	69	63
銅生産量（千ﾄﾝ）	89.2	96.4	103.6	107.2	106.2	107.1	111.7
従業員数（千人）	35.4	33.2	29.1	25.9	24.2	23.7	22.7

昭和35年の鉱山数141箇所･従業員数35.4千人が、同41年には鉱山数63箇所（55％減）･従業員数22.7千人（36％減）と大幅に減少している。一方、鉱山数や従業員数が減少しているなか銅生産量は昭和35年89.2千ﾄﾝから同41年111.7千ﾄﾝ（25％増）へ大幅に増加している。国際競争力を高めるため、鉱業の体質改善として高品位鉱床の確保、鉱量の増大とコスト引下げ（合理化による人員削減等）を図った結果であろう。

(5)長老沢鉱山(大宝鉱山)

「中野鉱山」について大滝会の方のヒアリングの際に一部要領を得ない部分があったけれども、今考えてみると実は本節の「長老沢鉱山」（大宝鉱業（株））と「中野鉱山」（同和鉱業（株）のち卯根倉鉱業（株））と２箇所の鉱山（会社）があることを前提にお話しされていたようである。筆者は、中野地区において遅くまで稼行していた鉱山は「中野鉱山」と呼ばれるもの１箇所（会社も１社「大宝（おおたから）鉱業（株）」）だけと思い込んでいたので要領を得なかったのである。大滝の方にとっては、中野地区に鉱山（会社）が2社あるというのは自明のことであった。例えば、鉱山事務所や従業員宿舎施設の位置であるが「長老沢鉱山」のほうでは、現在の中野第2トンネル米沢側の旧道沿いの左右にあり、中野鉱山の方は大桁地区のほうにあった。なぜ事務所（或いは根拠地）が2箇所もあるのか腑に落ちなかったものである。また、「長老沢鉱山」の選鉱場等も朴沢地区にあるのに、大桁の方にも別にあるようで不思議に思っていたものである。

今回『鉱産誌』により「中野鉱山」と「長老沢鉱山」の2箇所の鉱山が別々に存在することを知り、大滝会のかた達の話しにも納得することができたものである。

【長老沢鉱山（大宝鉱山）】（以下『鉱産誌』から抜粋）

鉱　　区　採掘747号

鉱業権者　大宝鉱業（株）

所 在 地　福島市飯坂町（旧信夫郡中野村）中野

本鉱山は福島と米沢を結ぶ国道（万世大路）筋に位置し、飯坂温泉駅（福島交通）の西方約12㎞にある。付近の地質は結晶片岩およびこれに貫入する花崗閃緑岩体からなる。また、これら花崗閃緑岩類は本地域の東辺で第三紀の凝灰岩・凝灰角礫岩等と接している。鉱床は花崗閃緑岩および結晶片岩中の裂罅（割れ目）を充填した石英・黄銅鉱・鉱脈で、桜鍾・朴沢鍾・大桁鍾の３脈が確認され、他に８ケ所露頭が発見されている。鉱脈にはいずれも黄銅鉱のほかに輝銅鉱・班銅鉱等の二次鉱物が生成されている。その概況は次のとおりである。

鉱　脈　名	走　　向	傾斜	脈幅	走向延長	銅品位（%）
大桁５号鍾	N80°　E	70°　N	25㎝	400ｍ＋	7
朴　沢　鍾	N80°　E	75°　N	30㎝	300ｍ＋	5～7
桜　　鍾	N75°　E	75°　E？	25～30㎝	2,000ｍ＋	5～10

本鉱山の発見時期は詳らかではないが、口伝によれば明治時代といわれている。その後大正時代にいたり松尾某氏の所有となったが、昭和14年現鉱業権者大宝弥男二氏の手に移った。昭和28年夏から本鉱区の開発に着手し、小規模な浮選設備（鉱石から鉱物を選別する設備、浮選＝浮遊選別はその一方式）を設け採鉱中である。

〔以下　筆者記〕

坑道（鉱脈）位置と採掘

「長老沢鉱山」という名称については、昭和37年頃社員として大宝鉱業（株）にお勤めになっていた大滝会の方にお聞きしたところ記憶にないそうで、一般的には「長老沢鉱山」とは呼ばれてはいなかったようである。普通は、「大宝（鉱山）」とでも云っていたようであるがはっきりしない。勿論、地元大滝の一般の方も「長老沢鉱山」というのは聞いたことがないそうである。

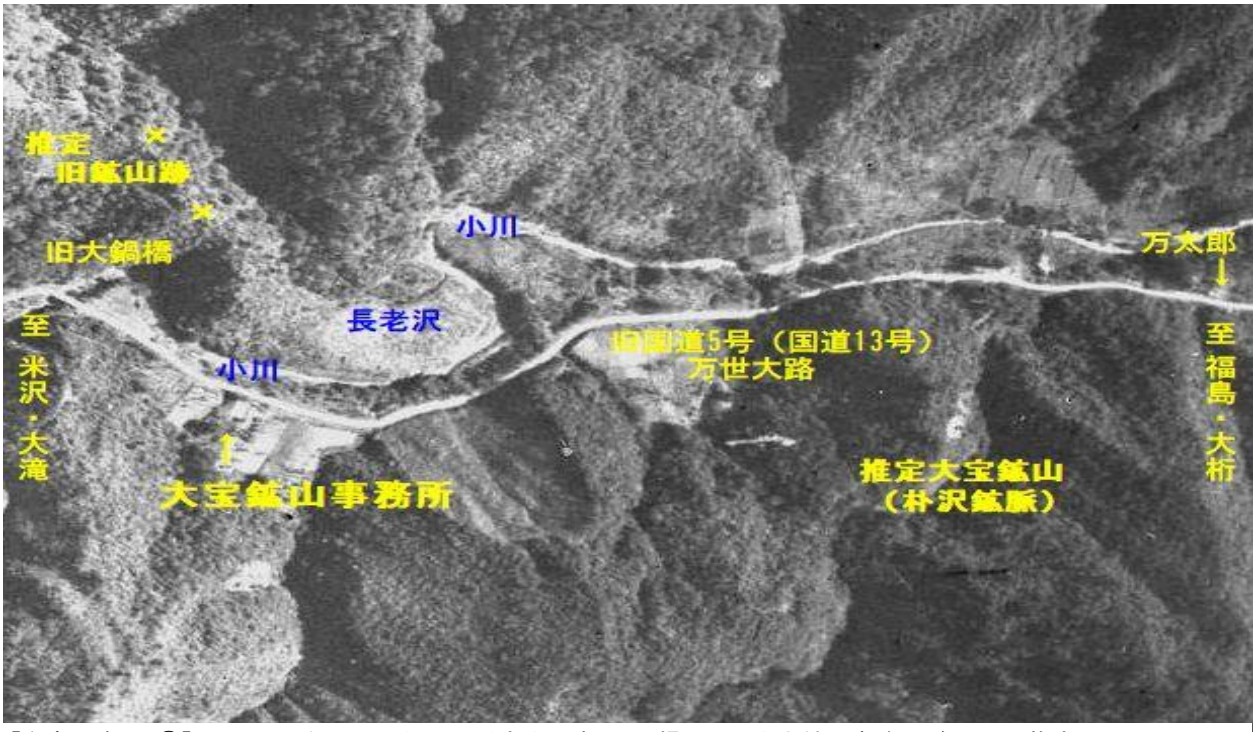
ところで長老沢（小字名）地区にも鉱山跡が数箇所あったようである。その場所は、現国道13号大鍋橋（約20ｍ小川の下流に旧大鍋橋跡あり）の数百メートル下流で小川の左支川長老沢が合流するがその上流あたりのようである（大滝会談）。上記『鉱産誌』の引用にもあるように、鉱山は明治期に発見されたようであるがそれは多分露頭で長老沢地区のものであったのであろう。それらが明治期の古い鉱山跡のものなのか定かではないが、字長老沢地内にあったことから発見箇所にちなみ「長老沢鉱山」と命名されたのかも知れない。

さて、当時の「大宝鉱山」の状況を元社員の方に伺ってみた。こちらの鉱山の採掘坑道（前記『鉱産誌』記載の鉱脈（鍾）一覧表）の具体的な場所は詳らかでないが、現中野第2トンネル米沢側の左側の山奥で採掘されていて、位置的には字朴沢に位置するようなので一覧表中の「朴沢鍾（鉱脈）」に該当するのではなかろうか。現場では立坑でロープを使って降りて行ったという。そこから掘出した鉱石はトロッコでその場所から少し下がった所に設置された選鉱場（方式不明）に運び、

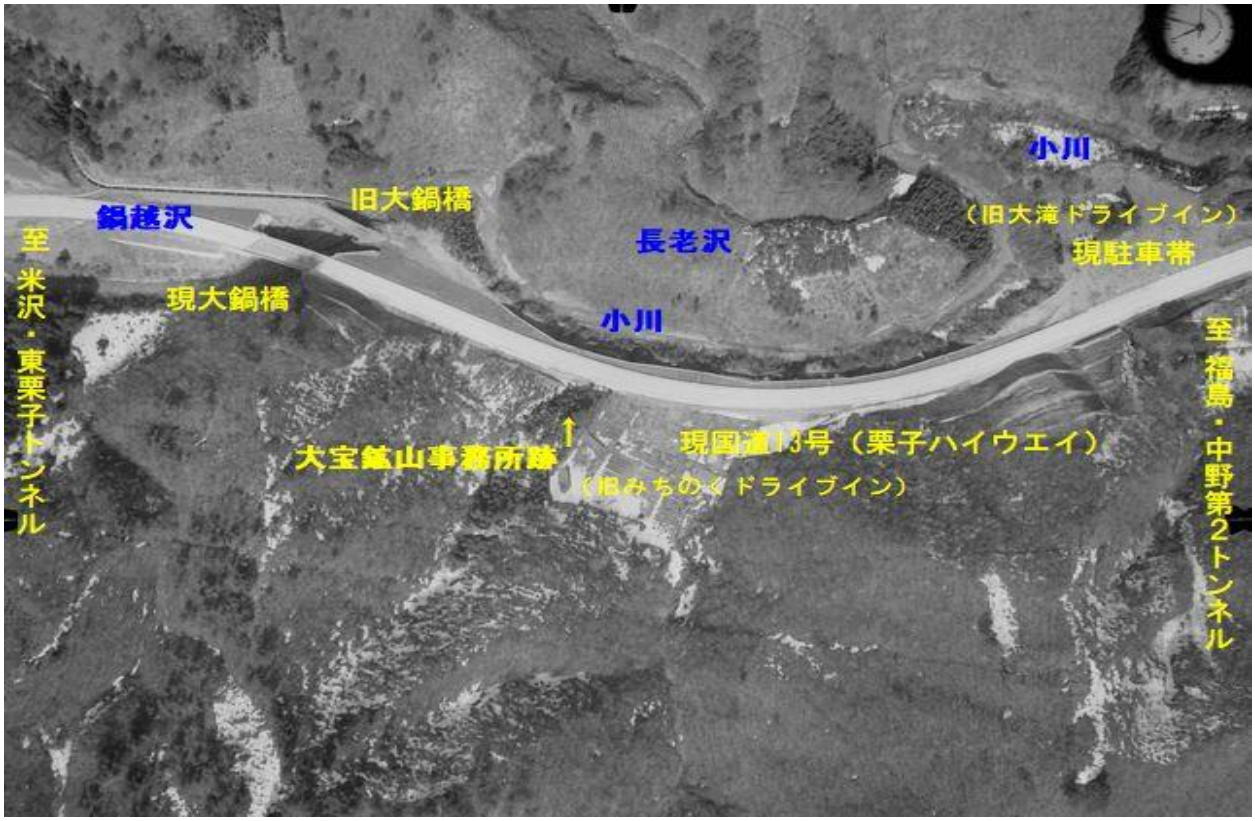
鉱物を選鉱し（作業員は大滝集落のご婦人）その鉱物はリヤカーで旧国道脇の集積ヤード（車の高さに合わせて設置されていた）まで運搬したそうである（大宝鉱山において選鉱場が設置されていたのは確かであるがその場所は不詳で、上記選鉱場と表現しているものがそれに該当するかも定かでない。ヒアリング結果をそのまま記述）。それからトラックで何処かへ運んで行ったとのことである。それは勿論最終的にはどこかの精錬所に運び込まれたのであろう。これは想像であるが、大宝鉱業（株）の当時の本社は秋田県秋田市で、秋田県といえば鹿角郡小坂町にあった小坂銅山が有名であり大きな精錬所もあったようなので、搬出された銅鉱物は福島駅辺りから貨物列車で小坂鉱山にでも搬入されたのではないだろうか。当時としては福島県内に臨海共同精錬所として昭和40年から小名浜精錬所が操業を開始しているが（小名浜精錬株式会社HP）安価な海外鉱石を原料としたものと思われ内陸からの少量の鉱石を受け入れたとは思われない。それにしても中野鉱山や戦前の蛇体鉱山の鉱石はどこの精錬所に搬出されたのか、最も基本的な情報であるがわからないのが残念である。**【参考写真－3①②】**

大宝鉱業（株）事務所等、昭和41年5月開通の栗子ハイウエイ工事で移転

現国道13号の中野第2トンネルから大鍋橋付近までの約L=0.8㎞は、現在旧大滝ドライブイン辺り（現駐車帯）までほぼ直線でその先は緩（ゆる）いＳ字カーブとなっている。曲がりくねっていた旧国道を改修して新国道（栗子ハイウエイ）としたところである。その旧大鍋橋手前の旧道沿い左側（米沢に向かって）に大宝鉱業（株）の鉱山事務所などがあった（現国道13号道路敷内）。またその斜向かいに従業員宿舎や倉庫があっという（旧大滝ドライブイン付近）。また、手前の右側（現国道13号中野2トンネル米沢坑口から米沢側へ約100ｍ付近）国道沿いには万太郎（個人住家、万太郎は屋号のようなもの、沢名に由来か）があり、大桁移転後の青葉学園三尾学園長がその一室を借りて執筆に励まれたという（『50年史』82頁）**【写真－5①②、参考写真－3①②参照】**。



【参考写真－3①】 昭和 23 年 6 月 朴沢付近空中写真（米軍撮影）。 大宝鉱山事務所が見える（推定）。
S230608 国土地理院提供（一部加筆）



【参考写真－3②】 昭和 41 年 3 月 朴沢（大鍋橋）付近空中写真 S41.3.12 国土地理院提供（一部加筆）

【写真－5①】 中野第 2 トンネル米沢側から現大鍋橋（大滝集落）方向を望む。写真右側に「万太郎」、同手前が旧国道分岐点で約 200 m行くと旧青葉学園跡。
写真奥は旧大滝ドライブイン、左右に大宝鉱業（株）事務所など。H240513

【写真－5②】 写真中央（国道敷内）大宝鉱山事務所跡、左側旧みちのくドライブイン跡、米沢側を望む。 上の橋梁は東北中央自動車道（E13）新大鍋橋。
写真奥が現国道 13 号大鍋橋。
現国道の右下が旧道で旧大鍋橋遺構（橋台）がある。H290916

したがって、その大宝鉱業（株）も万太郎も国道改良工事（S38～S39年度、S40年度舗装完成）にかかり移転することとなった。前者については『栗子トンネル工事誌』（1968年7月建設省福島工事事務所、以下『工事誌』と略記）に昭和37年度の用地補償の実績として次のような記載がある。

「変わったものでは、大宝鉱業KK（本社秋田市）の中野鉱山事務所および宿舎、機械室等の移転があり、営業補償等を含めて１件359万円を支払っている。」（1,066頁、傍点筆者）。また、「卯根倉鉱業KK」（中野鉱山）に関しては、その場所は分からないが土捨場を買収している（前掲書1,070頁）。

『工事誌』では、大宝鉱業（株）の事務所を本来であれば「長老沢鉱山」とすべきであるのを「中野鉱山事務所」と呼んでいて、その辺りの鉱山全体を「中野鉱山」と認識していた可能性がある。

長老沢鉱山の稼行期間ははっきりしない。明治時代にも採掘していた可能性があり戦前も稼行していたと思われる。戦後は、『鉱産誌』発行の昭和40年には稼行されていたことは確かであると思われるが閉山時期についてははっきりしない。昭和37年まで社員であった方が具体的な年月は不明であるが「遅くまでやっていた」記憶があると言っていたので、昭和39年に閉山した「中野鉱山」より後の可能性もある。『本邦鉱業の趨勢』昭和46年版（262頁）には企業名「大宝鉱業（株）」（長老沢（銅鉱））としてその前年までをも含め掲載されている。昭和47年版以降は企業名も無くなっている。しかし昭和46年まで稼行していたというのは俄には信じがたい（露頭箇所もあったというから採算ベースにのっていたのであろうか）。

なお、余計な話しであるが「中野鉱山」（所在地：朴沢）と「長老沢鉱山」（所在地：中野）の『鉱産誌』記載の所在地は逆でないかと思料される。

（6）大滝鉱山

大滝集落と最も関連のある銅鉱山であろう。ほとんど大滝集落内と云ってもよい場所に位置し経営的にも関わりを持った方もおられたようであり、集落の氏神様「大滝山神神社」創建にも関わりがあるという。

【大滝鉱山】（以下『鉱産誌』から抜粋）

鉱　　区　採掘299号

鉱業権者　渡辺寅之助

所 在 地　福島市飯坂町（旧信夫郡中野村）大滝

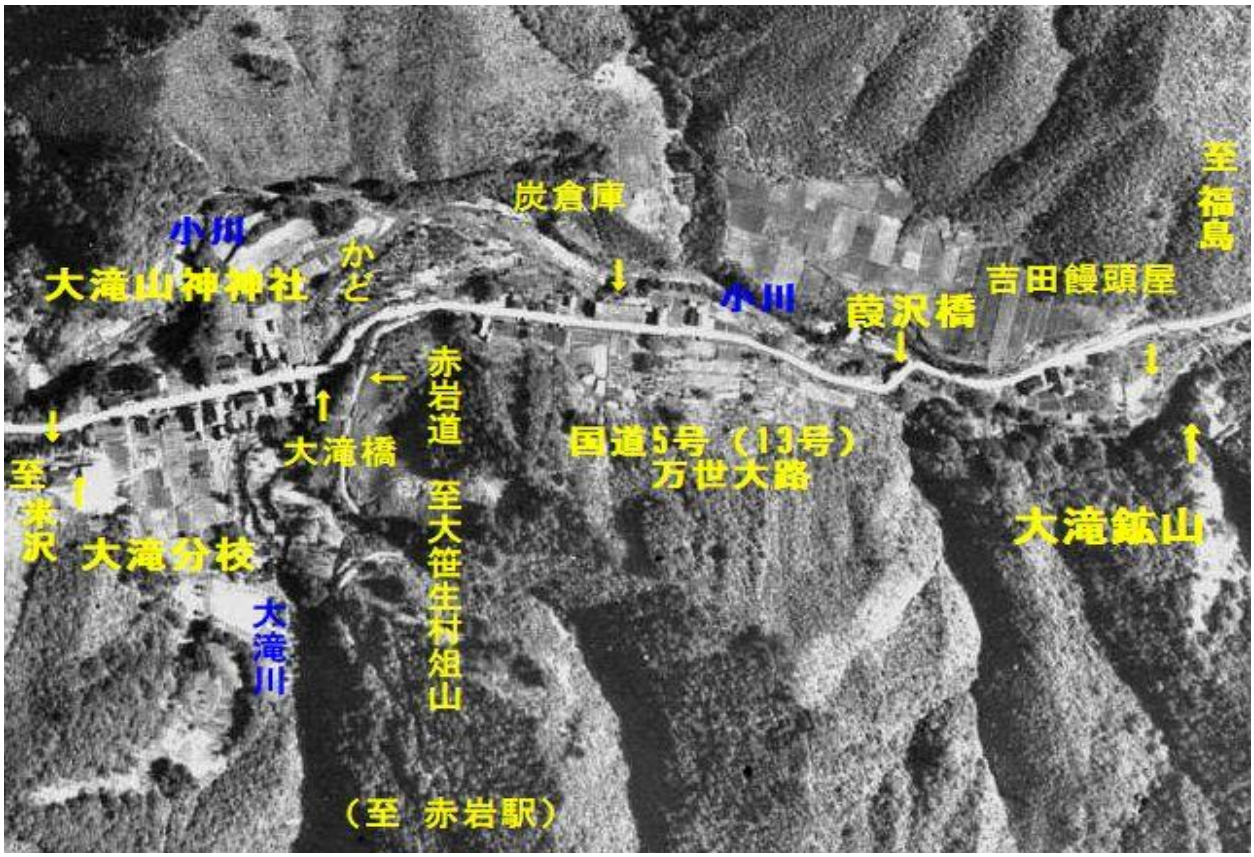
福島市から、米沢市に至る国道万世大路に沿って約16kmの大滝部落付近の南部山地にあり、発見以来幾代かの経営を経て、現鉱業者に移ったものである。

付近は角閃（かくせん）花崗閃緑岩およびこれを貫くアプライト（花崗岩類に伴う細粒の岩石、百科事典「マイペディア」より）からなり鉱床はこれらを貫く黄銅鉱・石英脈で、鉱脈形成後の断層活動で鉱脈の一部は粘土化し、その粘土中には鉱脈の破砕された断片が多量に存在している。鉱床は走向N70°Ｅ、南に56°内外傾斜して脈幅約40cmである。大正前半光石三平氏によって稼行され、同６年、銅鉱1,186tを算出したといわれる。昭和26年頃から松盛治氏により若干の探鉱が行われたが、現在は休山中である。

〔以下　筆者記〕

坑道（鉱脈）位置と採掘

大滝鉱山は、大滝集落の入口葭沢地区にあり旧葭沢橋下流百数十㍍の小川右岸に坑道跡を見ることができる。この坑道は、大滝鉱山最晩年のもののようで戦後採掘されたものという。　小川には、一時木橋が架けられていたそうである。大滝鉱山は、当初は銅鉱石が露出し品位も高く、採掘運搬も便利だったようである。大正期には露天掘りもおこなわれるなど大規模に採掘されていたらしい**【写真－4①②】【写真－6①～④】**。



【参考写真－4①】　昭和 23 年 6 月　葭沢付近空中写真（米軍撮影）。
大滝鉱山・葭沢橋・大滝山神神社が見える。S230608　国土地理院提供（一部加筆）

【参考写真－4②】　昭和 41 年 3 月　葭沢付近空中写真。　大滝鉱山跡・旧葭沢橋が見える。
国土地理院提供（一部加筆）S41.3.12

【写真ー6①】　大滝集落入口、葭沢橋（L=22.4m、W=5.5m、昭和 53 年 3 月完成、福島市役所）、福島側から望む。この下流（左側）百数十㍍に大滝鉱山。 H290428

【写真ー6②】　大滝鉱山全景。建物の後ろが小川で対岸に採掘坑道跡（最盛期には上の方で露天掘りも）。建物の位置に「吉田饅頭屋」さんがあった。　H290428

【写真ー6③】　写真中央、大滝鉱山坑道跡、最晩年の採掘箇所。手前は小川。H240506

【写真ー6④】　銅鉱石（黄銅鉱）、旧大滝鉱山から昭和 30 年代に採掘したもの。高野英治様所蔵

このことから大滝鉱山は莫大な利益をあげ、浮浪の身であった発見者（創業者）は一攫千金（いっかくせんきん）を得て鉱山成金となったという。その創業者の光石三平氏は、後に大滝山神神社の社殿を造営寄進したと伝えられている（後述）**【参考写真－5①②】**。

【参考写真－5①】　光石氏寄進と伝わる旧大滝山神神社　（離郷回想 20 周年記念大滝出身者の集い）大滝会柾木新吉さん提供　H101011

【参考写真－5②】　平成 18 年 10 月 8 日、再建された大滝山神神社（大山祇之尊、木之花佐久夜毘売命）。右端石碑は「大滝山神神社由来」の碑。H251013

しかし、大滝鉱山の埋蔵量は少なくその全盛期は長く続かなかったようである。戦後は残存鉱石を細々と採掘していたようであるがやがて廃鉱となり、サツマイモや里芋等根菜類の貯蔵所として地区の方々に利用されていたという。その鉱山の川向（左岸、手前）には、鉱山の作業員を相手としたまんじゅ屋（吉田屋）さんがかつて店を開いていたというから大滝鉱山には相当数の従業員が働いていたのであろう**【写真－6②参照】**。

上記引用の『鉱産誌』によれば、戦後松盛治氏という方が採掘を再開されているけれども、東京の方だったそうだが大滝ではその名前を記憶しておられる方はいないようである。大滝会高野英治副会長さんの祖父宮治氏が鉱山経営に関与されていたようで、火薬の購入や作業員の手配賃金支払いなどをおこなっていたとのことである。

（本節は『わが大滝の記録』（昭和 52 年 1 月）、「大滝会 HP」及び大滝会高野英治副会長ヒアリングを参考に整理した。）

大滝山神神社の由来

大滝山神神社は平成18年10月8日に再建されている。その由来について現地に記念碑が建立されているので、本稿や『鉱産誌』と一部齟齬（そご、食い違う）するところもあるけれども全文（原文のまま）紹介しておきたい。大滝鉱山関係についても言及されており貴重な史料である。

【参考写真―5①②参照】。

【大滝山神社由来】碑　全文（題字以外は縦書き）

大滝山神神社由来

よしたとえ　なみよ嵐よ　荒れもせよ

こころなごまん　大滝の名に

元大滝分校教師　小松道栄作

（時代背景）

明治十四年年十月三日　明治天皇東北　北海道ご巡幸のみぎり
栗子トンネル福島側に於いて、万世大路の開通式が盛大に
挙行され、同日天皇は、大滝駅の渡辺要七宅にご休憩
遊ばされた。氏の家の前には「鳳賀蹕の跡」の記念碑が
建てられ、現在も四代目正義氏により当時のまま大切に
保存されている。

（三ツ石三平　大滝山神社を祭る）

明治四十三年（月日不詳）万世大路を通行中の三ツ石氏は、
大滝の入口　葭沢に良質の鉱山を発見して一郭千金を得、
山の安全を祈願し大滝山神神社をお祭りしたと伝えられる。
祭神は　大山済祇之尊　コノ花咲クヤ姫之尊の二神である。

（大滝の全盛時代）

大正六年頃　大滝鉱山は鉱脈が尽き廃鉱になったが、
神社は当時の大滝宿に引き継がれた。大滝の最盛期は、
昭和十年頃　人口二六六名、四十三世帯　神社を中心として
元朝参りや　旧暦八月十七日の例大祭など大いに賑わった。
又、この頃　分校教師指導の下、青年会・女子会の活動が
盛んで機関紙「滝の声」が、ガリバン刷りで発行され、
文化的で平和な活気に満ちた時代が続いた。

（過疎化旋風興る）
昭和三十年代　我が国は、漸く敗戦から　立ち上がり高度成長
を続ける中、独り我が大滝は、都市との経済格差が拡大して
人口が流失し昭和五十四年を最後に遂に無人の里となる。
廃郷を予感した私達は、昭和五十二年春　急遽大滝会を
結成して郷土誌「わが大滝の記録」を編纂し、記念碑を建立
タイムカプセルを埋設した。そして、九十年の永きに亘り、
大滝をお守り頂いた氏神様を雪国に強い御影石作りの
お宮に造営の上、遷宮申し上げました。
願わくは故郷の再興と出身者家族代々の上に幸せを垂れ賜い
平成十八年十月八日大滝会
代表　紺野健吉

【参考】大山祇之尊（大山津見神）・コノ花咲クヤ姫之尊（木花之佐久夜毘売命）

●大山津見神

大山津見神（オオヤマツミノカミ）は、「大山に鎮まる霊」という意味で、この神が山々を統括することを示す。伊邪那岐神（イザナキノカミ）と伊邪那美神（イザナミノカミ）の御子。この神は多くの神々の父である。　須佐之男命（スサノオノミコト）によって八岐大蛇の脅威から救われ、その妻となった櫛名田比売（クシナダヒメ）、天孫･邇邇芸命（ニニギノミコト）の妻となった木花之佐久夜毘売（コノハナノサクヤビメ）も、大山津見神の御子である。邇邇芸命は、皇祖神･天照大神の孫（天孫）で、多くの神々を率いて「三種の神器」（八尺瓊勾珠・八咫鏡・草那芸之剣）と共に南九州体高千穂峰に降臨し、木花之佐久夜毘売との御子・火遠理命（ホオリノミコト／山幸彦）は天皇家の祖神となった。

すなわち、木花之佐久夜毘売が生んだ火遠理命は初代･神武天皇の祖父にあたるので、大山津見神は神武天皇の曾祖父ということになる（神武天皇の父は、火遠理命の御子・鵜葺草葺不合命（ウガヤウキアエズノミコト）である）。

大山津見神、木花之佐久夜毘売共に日本酒の祖神とされる。

・神格　山の神・海の神・酒造の神
・神徳　山林守護・漁業守護・鉱山業守護
・異称　大山祇神・大山積神等

●木花之佐久夜毘売命

木花之佐久夜毘売命（コノハナノサクヤビメミコト）は、上記のとおり大山津見神を父神に、神大市比売（カムオオイチヒメ）を母神とし、別名を神阿多都比売（神吾多津姫、カムアタツヒメ）という。富士山を主宰する女神として、富士山本宮浅間大社（静岡県）をはじめとする各地の浅間神社の祭神として祀られ、また子育ての神としても広く信仰されている。

比売命は、出産する際に戸のない産屋にこもって火をかけたものの無事に３柱の御子（火照命（海幸彦）・火須勢理命・火遠理命（山幸彦））を出産した。このことから、山の神（大山津見神）の秀麗な姫御子にして（美人の誉れ高い）、火を制御する霊力を秘めた女神として、日本一の活火山・富士山の神となり子育ての神となったのであろう。

・神格　山の神・火の神・酒造の神
・神徳　五穀豊穣・火難よけ・醸造の守護
・異称　木花開耶姫命・神吾田津姫命等

（本項は、『古事記と日本の神々がわかる本』（2015 年 9 月吉田邦博、学研パブリッシング）を参考に整理した。）

第2. 青葉学園の創設

青葉学園の創設について、その経緯と創設時に大滝集落がどのように関わったかのかについて整理する。

(1)三尾 砂 について

青葉学園創設者の三尾(みお) 砂(いさご)氏（明治36年（1903年）2月～平成元年（1989年）8月、享年86）は香川県大川郡志度町（現香川県さぬき市）出身の国語学者･ローマ字教育学者である。昭和3年（1928年）3月早稲田大学文学部卒業、翌年5月香川県高等女学校教員として奉職、肺結核のため昭和5年12月退職する。以後10年間療養生活に入るが、翌年には上京して快復後早稲田大学大学院に入っている。この療養生活中はもちろんであるが後の青葉学園の創設その後の運営について妻寿美子女史の献身的な支えがあったことを付記しておきたい**【参考写真－6①】**。

【参考写真－6①】　三尾砂･寿美子ご夫妻
赤岩にて　昭和 30 年
青葉学園様提供（たんぽぽ館）

その大学院入学の前後から言語学についての論文を発表し国語学者としても注目を集めたようである。さらに三尾は、ローマ字の国字化を目指し早稲田大学在学中からローマ字研究を続け社団法人日本ローマ字研究会（大正10年設立）の中心幹部として活躍している。戦後、文部省（現文部科学省）はローマ字教育に力を入れることとなるが、三尾はその教科書づくりやローマ字教育の指導書の作成･実践について重要な役割を果たしたことでローマ字教育学者（教育者）としても知られる。また、戦争末期には戦災孤児などが増加してきて、これら不幸な子供達を引き取り養育し教育していきたいという考えを持ったようである。（以下文中敬称略）

(2)福島への移住

終戦前、その言語研究（ローマ字国字化の推進）と子供の養護教育を両立させたいという念願から、戦災孤児を引き取り、養育を始めようとしたが、戦争の激化と度重なる空襲により首都東京周辺での実践は断念せざるを得なかった**【参考写真－6②】**。

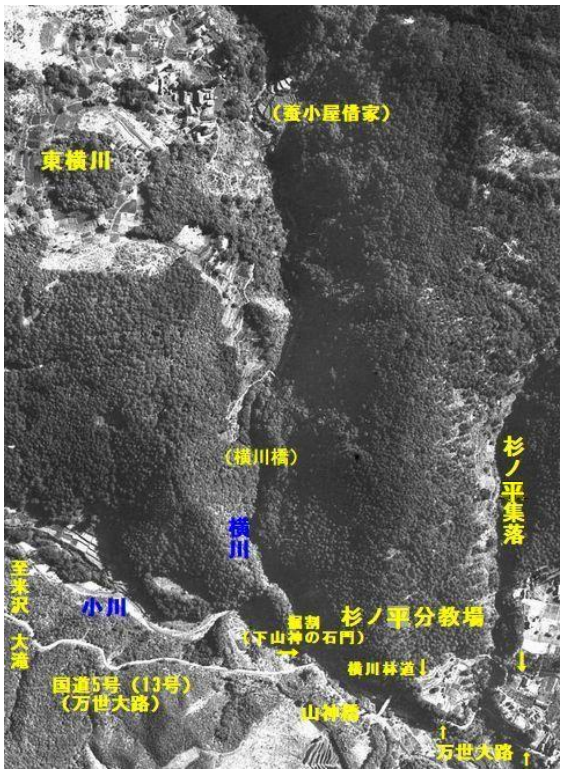
【参考写真－6②】　墨田区空襲跡　総務省 HP より

余談であるが、昭和20年8月末筆者の母親はその空襲で焼け野原になった東京を見たと生前語っていた。筆者も母に抱っこされ一緒に見たそうである（生後半年なのでもちろん記憶にない）。そこで安全な地を探すことになり、友人で後に（社）日本ローマ字会専務理事を務めた広島文理大学佐伯功介教授に相談したところ知人の福島県石井政一知事（佐伯教授と東京帝国大学同期卒業）を紹介された。石井政一(いしいまさいち)知事は奈良県生駒郡(現生駒市)出身で第38代(S19.4.18～S20.10.27、在任約1年6ヶ月）の官選知事である（『ふくしま知事列伝』）。県知事として終戦前後の公務多端な時期であったと思われるが、石井知事は、三尾と面談の上「出来るだけ山の中の分教場の教員に

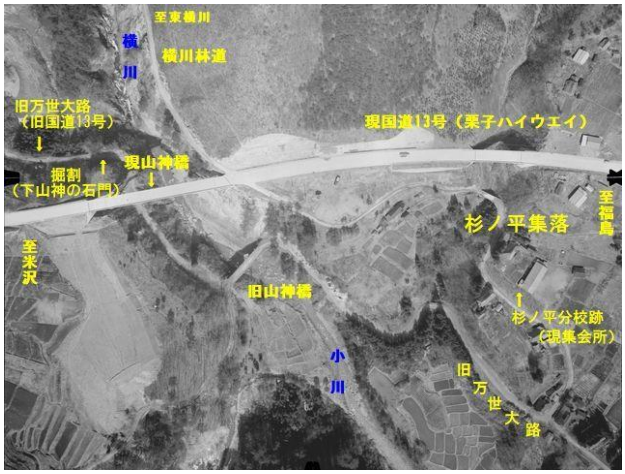
なりたい」との希望を踏まえ、会津などいくつかの候補地選びに奔走してくれたという。石井知事は山奥の農村出身ということで苦学して中学（現在の高校）を卒業されたようで（上掲書）、三尾の良き理解者となったと思われる。三尾は、いくつかの候補の中から中野村国民学校杉ノ平分教場（所在地：当時の福島県信夫郡中野村字杉ノ平、現福島市飯坂町中野字杉ノ平）を自ら選んだようである。三尾は、終戦前の昭和20年4月7日、中野村に移住しその杉ノ平分教場の教員として奉職した（奇しくもその日、史上最大の戦艦「大和」（基準排水量64,000㌧、263m×38.9m、S16.12.16竣工）、鹿児島県坊ノ岬沖・徳之島の北西200浬（かいり）（37km）で撃沈された日。『太平洋戦争全史下』講談社文庫等）。

分教場のある杉ノ平集落は、福島市中心部から約16kmの旧国道13号（万世大路）沿いにあり、分教場は旧国道から100mほど北側へ入った所にある。現在は、そのすぐ先が現国道13号の山神橋（３代目）福島側のたもとになっており、そこ（国道）を横断すると「横川林道」の起点となる。三尾たち家族の住まいは、その山神橋の北方、横川（本川小川の右支川）沿いに「横川林道」を約１km奥に入った「東横川」という所であった。住まいは、その東横川の農家の蚕（かいこ）小屋を借りたものである（当時、貸主の農家は養蚕を中止していた）（**【参考写真－7①～③】【写真－7①～③】**）。

【参考写真－7 ①】　大桁･杉ノ平･東横川　位置図　青葉学園提供



【参考写真－7 ②】 昭和 23 年 6 月頃の杉ノ平及び東横川付近空中写真国土地理院提供（一部加筆） 平 H230608



【参考写真－7 ③】 昭和 42 年 3 月頃の 杉ノ平付近空中写真。国土地理院提供（一部加筆）。 S41.3.12

【写真－7①】 横川林道、横川を横断する林道橋（横川橋、S42.1 竣功、前橋営林局）が見える。東横川（蚕小屋）はこの先。 H241129

【写真－7②】 現在の杉ノ平地区全景（写真中央）、福島側を望む。左側、現国道 13 号山神橋。奥のトンネルは現高平隧道（トンネル） H240513

【写真－7③】 現在の杉ノ平集落。左側旧中野村国民学校杉ノ平分教場（のち中野小学校杉ノ平分校、現杉ノ平集会場、三尾先生当時は一教室であったが後に二教室に増築したという）。現在集落は7世帯（最盛期 15 世帯） H290916

(3)蛇体鉱山事務所跡へ

三尾は、「年来のローマ字による教育と漢字カナによる教育の比較研究実践と戦災孤児を養育する目的」を達成する場所として杉ノ平を適地として選らんだもので、本来であれば福島移住と共に戦争孤児10人程度を一緒に連れてくるはずだったという。しかし、東京大空襲（昭和20年3月10日）の混乱の中でそれが不可能となり、取り敢えず家族だけの福島移住となったようである。その後、孤児を引き取り養護施設とする考えであったけれども、蚕小屋を借りていた農家が戦後養蚕を再開することとなりそこに住めないこととなった。当時、収容予定の10人もの児童と家族（その他の教職員）とを受け入れることのできるような替わりの建物は見つかるはずもなく難渋していたところ、蛇体鉱山の廃屋が売りに出されていることを知り現地調査をおこなった上で廃屋を購入し移転することとなったものである。昭和21年4月のことで、これに伴い杉ノ平分教場の教員を続けることは不可能となり辞職している。結局杉ノ平（東横川）での生活は1年であった。

筆者は最近、杉ノ平集落を写真撮影のために久しぶりに訪れた。その際にたまたま農作業をしていた老夫婦からお話しを聞くことができた。ご主人の方は筆者と同年代のようで、三尾先生からは直接習っていないとのことだが三尾先生の名はよくご存じであった。杉ノ平の後は蛇体に、その後は大平（おおだいら）（俎山（まないたやま））へ行ったのだと教えていただいた（大桁は抜けていた）。また、三尾先生の後任は小松道栄先生（T15.4～S6.3、大滝分教場教師）とのことで、ご主人自身は小松先生の娘さんに杉ノ平分教場で習ったのだという。杉ノ平分教場（分校）は現在地域の集会所となっているけれども、三尾先生の時代に一教室であったものをその後二教室に改築したものだということである。三尾先生は、僅か1年の滞在であったかも知れないけれど、杉ノ平集落では、70年を経て今もなお語り伝えられ忘れられずにいることに感銘を受けた。杉ノ平集落の世帯数は現在7戸で最盛期には15世帯あったそうである（**【写真－7③】参照**）。

さて、昭和21年5月9日、東横川から蛇体へ引越しすることなった。その時の経緯について箇条書き風に整理すると次のようになる。

【引越し行程】

●東横川──→杉ノ平（国道５号）──→大滝（吾妻定さん宅）→（旧西川橋）──→蛇体

（国道５号は昭和27年12月新道路法により国道13号となった。）

（**【参考写真－8①②】【写真－8】**）

①東横川──→杉ノ平（国道５号）　〔約１㎞〕

杉ノ平青年団が前日の「そだまるき」**(＊)**で疲れて手伝えなくなり、6年生くらいの生徒（多分、杉ノ平分教場の生徒）が東横川から少しずつ杉ノ平（旧国道13号）まで荷物を運んでくれた。（**【参考写真－7①～③】・【写真－7①～③】参照**

(＊)粗朶（そだ、木の枝）を集め束ねること。そだは、炊事や暖房、風呂の薪として使用。

②杉ノ平（国道５号・万世大路）→大滝・吾妻定さん宅　〔約４㎞〕

・大滝まで牛車で運んだ（10時出発）。

・中野小学校大滝分教場の佐藤武雄先生の好意により「定さん」という親切な方が自宅の中に迎え入れ休ませてくれ（12時着）、荷物を一晩預かってくれることになった。

（「定さん」とは大滝分教場入口斜向かいに住んでいた吾妻定氏と思われる。高野副会長談）

・佐藤武雄先生が預かった荷物は大滝の青年団に明日運ばせるので、皆さんは蛇体へ向かって急ぎなさいと言ってくれた。

③大滝･吾妻定さん宅（国道５号･万世大路）→（旧西川橋･蛇体道）→蛇体　　〔約１＋６㎞〕

・三尾夫妻家族５名、職員２名の７名の移動で定さん宅を昼食後１時半に出発。図書等の荷物預ける。

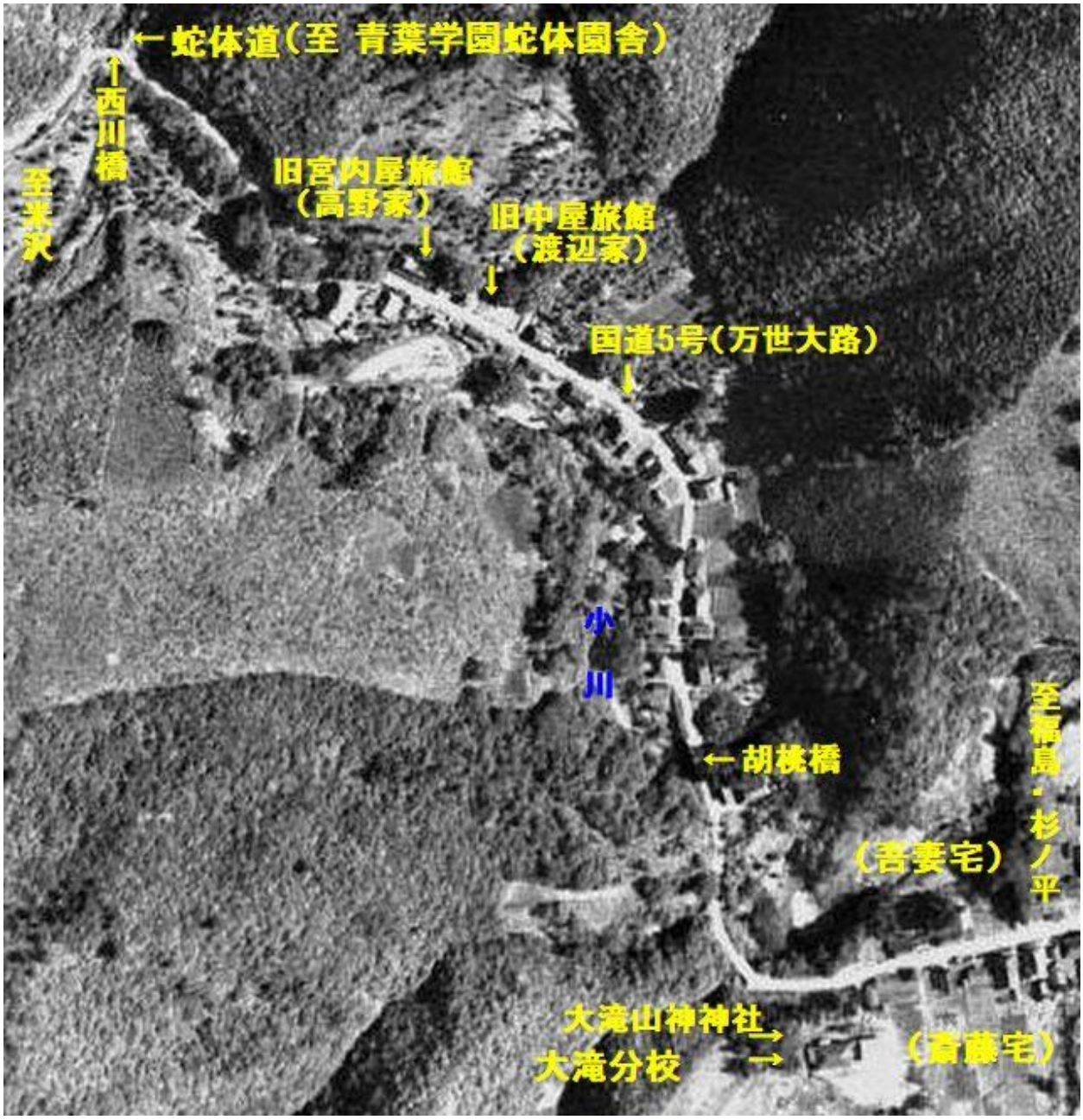
「夜具と米塩、鍋、お椀、箸、少量の煮干し、昆布等」持参。

・峠（恐らくクビト峠）でご飯を炊いて食べる**【参考写真－8③】**。

・夕暮れ迫る頃やっと蛇体（事務所跡の川向）着。

烏川（増水していた）に橋を架けるのに１時間を要し、暗くなってから建物に入る。

【参考写真－8 ①】 青葉学園位置図　青葉学園様提供(『50 年史』) 一部加筆



【参考写真－8 ②】昭和 23 年 6 月　大滝地区空中写真（米軍撮影）。S230608　国土地理院提供（一部加筆）

【写真－8】 現在の大滝集落大滝地区（無人）、大滝橋から米沢側を望む。
右の小屋（大滝会事務局）の奥が吾妻定さん宅跡、その道路向が旧大滝分校入り口（桜が咲いている）。
大滝橋（L=10.55m、W=5.5m、S40.11 完） H290428

【参考写真－8 ③】　クビト峠　青葉学園様提供（『50 年史』）

【参考】大滝分教場佐藤武雄先生について

「昭和の大改修」を実施した当時の内務省福島国道改良事務所において、作業員に対する賃金の支払いについての実質的な責任者を勤められた方である。大滝集落在住で、後に大滝分教場の教師となられた。この「昭和の大改修」（万世大路改修工事）とは、明治期開通（M14（1881）.10.3）の初代万世大路（現在の国道 13 号）は荷牛馬車対応の道路であったので、自動車も通れるように昭和 8 年 4 月～昭和 12 年 3 月にかけて当時の内務省（現国土交通省）が直営工事として直接実施した改修工事のことである。

当時の賃金の支払いは、会計係（人夫総代と称する）として民間の方に委託し、立て替払いをお願いしていたようである。その人夫総代として旧中野村の紺野倉治氏、直接の事務取扱（責任者）を大滝集落（葭沢）の佐藤武雄氏が務められたのである。佐藤氏は当時、夜間に訪問された家で帰りに提灯を勧めても夜道は馴れていると言って必ず断ったそうである。それは、賃金支払いの計算を暗い部屋において独りでおこなっていたために、暗いところに馴れていたからだという。「昭和の大改修」では最盛期には 1,000 人もの作業員が働いて、中には短刀持参の物騒な作業員もいたようである。佐藤氏は福島からの現金輸送時には、警察の斡旋によりピストルを懐中にしのばせていたということである（『福県直轄道路改修史』252 頁）。

なお、前述の通り佐藤氏は後に中野小学校大滝分教場の教師を務められた。大滝会ご健在の教え子さんのお話しによれば、厳格で教育熱心な先生であったようだ。授業では、使用済みの賃金支払用紙の裏面を再利用し、計算練習や書取り練習をさせられたということである。

青葉学園の創設、後の運営に関して物心両面いろいろと貢献されたと『50 年史』は伝えている。

●研究所日誌によると、

5 月 11 日、朝 9 時に佐藤先生が蛇体に来られ、続いて大滝青年団 30 名と児童 8 名が荷物を運んで来てくれた（5 月 10 日ではないが）。

この時の荷物運びには、木村会長、高野・柾木両副会長とも参加していないとのことであるが、当時の大滝集落の世帯数は 40 前後であり、大滝集落ほぼ総出の手伝いになったことが想像できる。

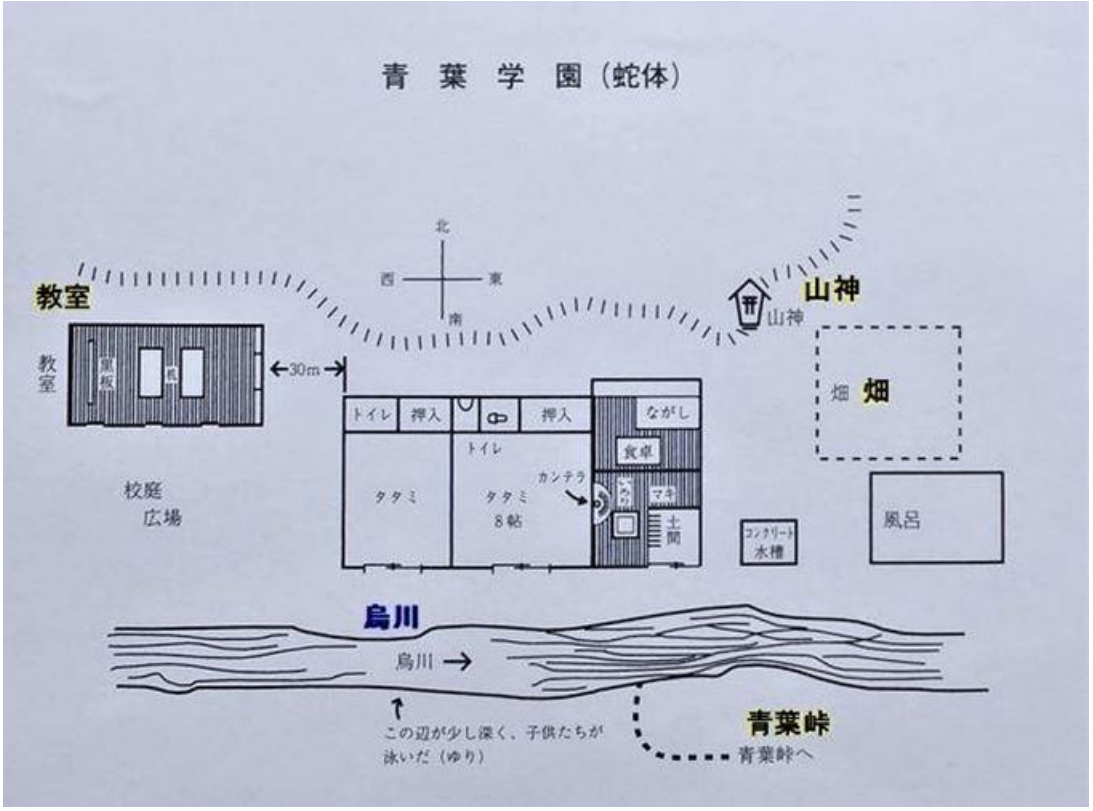
(4)青葉学園蛇体園舎

青葉学園蛇体園舎の位置状況について前述と一部重複するがここで再確認して起きたい。

今回の青葉学園蛇体園舎跡の探索では、残念ながら目的地に到達出来なかったけれども、青葉学園の云う青葉谷を見下ろす青葉峠のほぼ 1 ㎞手前までは到達できたと思っている。我々は、クビト峠を下り横川（本川烏川）を越えた。この後の説明は実地に見聞したところではないが、大滝会の皆様の情報によれば、横川を越えてからはほぼ平坦な道が続き、烏川が見える尾根筋（青葉峠か）に出るようであるである。その青葉峠（青葉学園命名）を越え急坂を下り（地元の方は七曲と云う）烏川右岸沿い下流の方へ向かうと間もなく右手の斜面に少し平になったところがあり坑道（蛇体鉱山蛇体坑）が見えるという。その蛇体坑の辺りには平地がなく、従って鉱山事務所或いは作業員宿舎（飯場）は烏川の川向の比較的平坦な川岸に設けられていたようである。閉山後 3 年ほど経っていて（(『50 年史』70 頁)）宿舎の方はかなり潰れていたけれども、事務所建物はまだしっかりとしていたので、これを教室と住まいにして昭和 21 年 6 月青葉学園（児童養護施設、私立小学校）がその地に開設されたというわけである（前掲書 23 頁）。そこには旧鉱山の畑もあり、良い野菜が収穫できたそうである。その場所は「川の州で土が肥えていた」（前掲書 57 頁）という。当該箇所の 200～300ｍ下流に烏川左支川枯松沢（かれまつざわ）が合流していることから付近もかつては川の氾濫原だったのかも知れない。また、青葉学園（旧鉱山事務所跡）の住所については、『50 年史』では「茂庭村蛇体」としながらも、必ず「俗称」と注書きしているので、正式には「蛇体」ではなかったことを知っていたと思われる。烏川の右岸蛇体坑のある方が字蛇体（蛇タイ）

であり、川向の学園のある方は「字枯松沢」になっているようである（学園側の公称住所は福島県信夫郡中野村大滝青葉谷、本稿では新漢字で表記、以下同じ）。

園舎は、写真や絵画を見ると本当に烏川の直上となっている。青葉学園の学園歌の一番目の歌詞は「いつも窓から見てるんだ　どっちを見ても青葉だよ　川が流れる音たてて　ホーラかじかが鳴いているよ　青葉学園うれしな」（三尾砂･作詞、パンフレットより）とうたわれているがこの学園創設の地の風景を表現したものであろう**【参考写真－9①～③】**。



【参考写真－9①】　青葉学園蛇体園舎　　青葉学園提供（『50 年史』）

【参考写真－9②】　青葉学園蛇体園舎（S21.5～S21.10、6 ヶ月）
昭和 21 年　青葉学園様提供（たんぽぽ館）

【参考写真－9③】　青葉学園蛇体園舎絵画
昭和 21 年
青葉学園様提供
（たんぽぽ館）

(5)青葉学園の開設(蛇体園舎)

前述の通り昭和21年5月9日に三尾一行が到着した烏川のすぐ対岸には、かつての鉱山事務所或いは作業員宿舎（飯場）が比較的平坦な所に設けられていた。廃屋同然となっていたけれども事務所建物はまだしっかりとしていたのでこれを青葉学園の教室と住まいにすることとした。

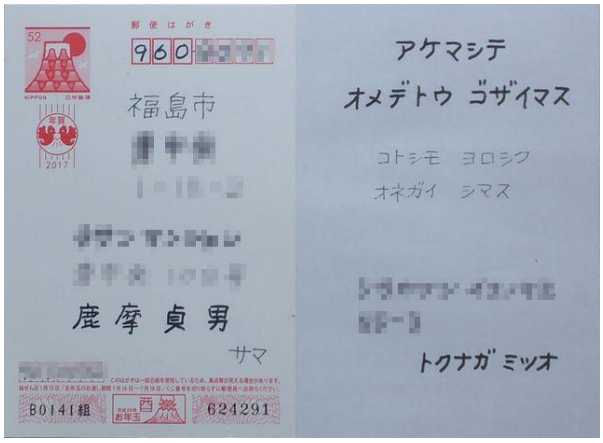
なお、前にも触れているが青葉学園（旧鉱山事務所跡）の住所については、『50 年史』(「刊行のことば」）では「旧伊達郡茂庭村蛇体」(「俗称」）となっているけれども、この蛇体と云う地名は気に入らないのでそれに替え付近一帯を**「青葉谷」**と命名、学園の名称を**「青葉学園」**（住所は**「信夫郡中野村大滝青葉谷」**と称す）としたという（5 月 27 日)。また、蛇体道から青葉学園の見えるところを**「青葉峠」**と命名した。みんなの姓も**「青葉姓」**とし名前で呼び合い全員青葉家の家族になったのだという（『50 年史』)。そこは、まさに青葉の名にふさわしく目に見える限り、青葉若葉の緑したたる平和郷であった。

〈新国民教育研究所を設立〉

三尾の計画としては、まずここに新国民教育研究所を設立し、その附属としてローマ字教育の実験小学校を作るというものであった。準備期間を経て昭和 21 年 6 月 1 日、福島県伊達郡茂庭村蛇体（俗称）の地、旧蛇体鉱山事務所･作業員宿舎（飯場）跡に新国民研究所を設立（同時に附属児童教育機関青葉学園＝青葉学園国民学校、のち青葉学園小学校を創立）した。その設立趣旨はつぎのようである（28 頁、415 頁)。

新国民教育研究所設立趣意書(要旨)

「戦後、日本の再建は文化国家になることにあるとし、すべての国民に平等に文化を獲得させるためには、漢字を廃止して誰にでもすぐに覚えられるカナとかローマ字のような表音文字にすることが必要である**【参考写真－9④】**。



【参考写真－9④】　平成 29 年元旦。50 数年間親炙している徳永光男先生は今もカナモジカイの会員です。

漢字を廃止すれば、国民学校 6 ヶ年（現在の小学校 6 ヶ年）の教育が 4 年ですみ、中等学校（現在の中学校）2、3 年程度の学力がつくであろう。これは実験してみなければ分からないので、漢字廃止に伴うさまざまな問題を研究しながら､カナ･ローマ字を基本とした教育を実践し 6 ヶ年の教育能率を、一般の国民学校と比較する。

なお、戦災孤児･軍人遺児･外地引揚孤児を生徒として研究所附属学園に収容し養育することも研究所の目的とした（当初は国民学校初等科 1 年生、2 年生のみの募集とし教育期間は義務教育年限とする。全員寄宿制)。附属学園の名称を青葉学園と称することとした。

研究題目（抜粋）

・漢字廃止の実践的研究

・漢字廃止後の国字問題の研究

・カナ及びローマ字の分ち書きの研究

・カナ及びローマ字の教科書及び一般児童図書の編訳著　等

・用字はカナ及びローマ字に限る

・上記により６ヶ年の教育能率を一般の国民学校（現在の小学校）と比較する

（青葉学園小学校の創立）

この新国民教育研究所所長、青葉学園（私立小学校）園長はもちろん三尾 砂（いさご）である。研究所の顧問には、安部 磯雄（政治家、社会主義者）・尾崎 行雄（政治家、憲政の神様）・佐久間 鼎（かなえ）（国語学者）・田中館（たなかだて） 愛橘（あいきつ）（物理学者）・牧野 富太郎（植物学者、文化勲章受章）等著名人が名を連ねている。

＊新国民教育研究所開所式

６月 16 日（日）、新国民教育研究所の開所式がおこなわれている。大滝からは、佐藤武雄先生や須田辰蔵村議（大滝）が出席している。

青葉学園創立趣意書

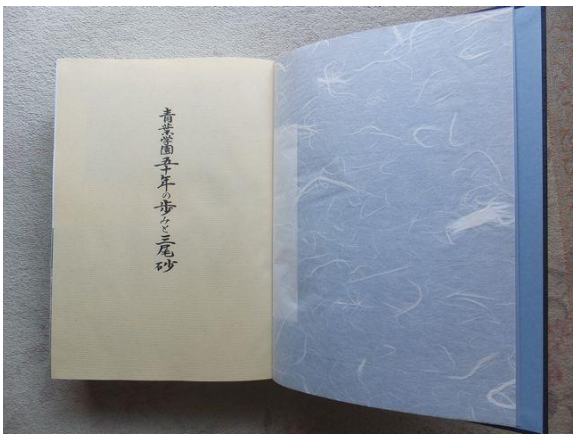
青葉学園は、カナ･ローマ字教育の実験所として新国民教育研究所の附属機関として設立した。その趣意書は、新国民教育研究所設立趣意書と同じもので日付が 1946 年６月５日付けである。

（青葉学園の創立は前記のとおり昭和 21 年６月１日でありこの日が創立記念日となっている。）

青葉学園始業式

昭和 21 年５月９日東横川から蛇体に引越し、廃鉱山の建物の整備（住居、教室）など諸準備を整え、昭和 21 年６月５日（水）始業式を迎えた。生徒７名、職員５名でいよいよ新たな挑戦が始まり以降大桁へ移転するまでの５ヶ月間新しい生活を送ることとなるのである。

この蛇体の学園（小学校）におけるユニークなローマ字による授業や自給自足の人里離れた山奥の生活ぶりはそれだけでも一つの物語となるような極めて興味深く面白いと云っては語弊があるかもしれないけれども、数々のエピソードは驚くことばかりである。しかし、これらは本稿の範囲でないことから特に記さないので、興味ある向きには『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』**【写真－9①】**をお読みになることをお奨めしたい（蛇体時代のみならず、以下大桁や俎山、土船についても同様である）。



【写真－9①】『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』
（平成８年６月 15 日発行）
青葉学園様提供

学園創設の地として蛇体を選んだ理由

次節に示すように青葉学園は、大桁へ移転することとなるけれども、そもそも蛇体を選んだ理由はどのようなことだったのか、『50 年史』に次のように端的に述べられているので改めて紹介しておきたい（22 頁）。

①土地付きの建物がちょうど手に入ったという経済的理由。

10 人近い人数を収容できる新たな学校･住宅の確保は予算面から困難。

②まわりの小学校から４㎞以上離れていないと私立小学校が許可にならない。

③世間の人達特にジャーナリズムから離れた所にしたい。

（6）蛇体脱出、大桁へ

さて、冬を間近にして、青葉学園の三尾達は地元の人達から思いもよらぬ意外な話しを聞かされた。

それは蛇体地区では｢深い雪で人里との交流が途絶える半年､十分なたくわえの食料もなくて、子供をかかえた学園は到底、この冬は越せない｣というのである。結局は「土地の人の忠告をもっともと受止めて、昭和 21 年（1946 年）10 月 24 日蛇体を後に」することとした。(81 頁)

冬期の半年間、蛇体は雪のため完全に孤立し外界と全く交通途絶状態になる。東京の人間である三尾達にとっては想像もできないことでそれを聞いて仰天したという。土地の人というのは多分大滝のかた達であろう、佐藤武雄先生もその中にいたに違いない**【参考写真－9⑤】**。

【参考写真－9⑤】　国道 13 号（5号）大滝集落積雪状況（旧宮内屋旅館高野家前）、昭和 40 年頃。　これから以西（米沢）は冬期（5 月まで）交通止めとなる。蛇体はこれよりも雪深し。大滝会 HP（伊藤弘治様）提供

そこで今度は、大滝集落から国道 5 号（万世大路、後の 13 号）を 2 ㎞ほど福島側へ下ったところの大桁地区にある鉱山廃屋に移転することとなった。その大桁校舎の位置や周りの状況等については、前述の中野鉱山の節の中で記述しておいたとおりである。

『50 年史』の中では、大桁地区に移転先を決定した経緯或いは引越の模様などについては詳述されていないので不明である。しかし、今回の引越（S21.10.17～10.20）についても佐藤武雄先生を中心として大滝集落の方々が協力したことは確かであろう。　大滝会木村会長さんや高野副会長さん達が多分小学生の頃であったと思われるが、夥(おびただ)しい数の図書類の運搬を手伝った覚えがあるそうである。

大桁校舎は､昭和 21 年 10 月 24 日から昭和 23 年 10 月 17 日までほぼ 2 年間に亘(わた)り使用された。こちらは､雪に追われて蛇体からの緊急避難として一時的な仮屋の位置づけであったようである。新しい本格的な建物校舎等がほぼ完成したことから昭和23年10月10日から17日にかけて旧信夫郡大笹生村俎山(しのぶぐんおおざそうまないたやま)（現福島市大笹生俎山）に引越をした。

(7)その後の青葉学園

俎山以降については本稿の範囲外であるが若干の経緯について次に記しておく。

青葉学園俎山園舎へ

一時的に大桁校舎で授業をおこなっていたが、いずれ増加する児童を考え 25 人位を収容できる建物を新築したいということで土地を探していたところ、大滝の斎藤乙次郎が俎山の土地を見つけてくれたようである。俎山は、大滝から赤岩（駅）に出る赤岩道（人道）のほぼ中間（**【参考写真－8①】参照**）に位置する。赤岩駅からは途中戦後入植した大平（おおだいら）開拓地（現在無人）を経て行く。

俎山の施設は前述のように昭和 23 年 10 月の半ばにはほぼ完成し大桁から引越をしたが、この際にも大滝分教場佐藤武雄先生が分教場の生徒を動員して手伝っている（10 月 17 日馬車で４往復）**【参考写真－10】**。

【参考写真－10】 俎山園舎全景（S23.10～S30.6、7 年間） 室数：蛇体5、大桁 5、俎山 17。青葉学園様提供（『50 年史』）

佐藤先生は、この後も物心両面で青葉学園を支援しているようである。また、俎山園舎の建設に関しては斎藤乙次郎が私財をなげうってその後の学園の運営についても支援していて、前にも紹介しているが『50 年史』の中では 9 頁にわたり青葉学園の発展の基礎をきづいたとして顕彰されている。

俎山には昭和 30 年（1955 年）6 月まで 7 年間いたことになる（昭和 23 年 10 月～昭和 30 年 6 月）。

ローマ字教育の終焉

なお、これも本稿の範囲外ではあるが、あのローマ字教育のゆくえが気になるところなのでその後の経緯につて若干記しておきたい。

ローマ字教育実験小学校として、昭和 21 年 6 月 1 日に青葉学園国民学校（小学校）が蛇体に創立されたことは前に述べた（旧私立学校令による運営）。大桁時代には、教育基本法及び学校教育法が公布され（昭和 22 年 3 月 31 日）、国民学校は小学校（中学校）となり、青葉学園は新たに「私立青葉学園小学校」として認可されている（昭和 23 年 4 月 30 日）。この際の学則にも定められているように教育実験（ローマ字教育）をおこなうことが明記されており、引き続きローマ字教育が実施されている。俎山時代となるが、昭和 24 年 12 月には私立学校法が公布され、私立学校は「学校法人」が運営することとなり個人経営はできなくなった。法人格取得のための必要な財産的基礎（設備、資金等）は相当のものが必要とされたようで、筆者の推測によれば青葉学園はそれに達することができなかったのではないかと思われる。従って、青葉学園小学校は昭和 26 年 3 月に閉鎖され、4 月から生徒は一般の児童と同じく、赤岩駅の近くにあった福島市立大笹生小学校の大平分校に通学することとなった（201 頁）。「かくして、青葉学園小学校の閉鎖により、実験という最初の目的達成は、……不可能となった」（202 頁）ようで、ローマ字教育は終焉（しゅうえん）をむ

かえたそうである。

以後、学校施設と養護施設の両方を運営することは断念し、養護施設の運営一本となり今日に至っているということである（養護施設についても、社会福祉事業法の公布により昭和 28 年 3 月から社会福祉法人となり運営している）。

青葉学園土船園舎にて

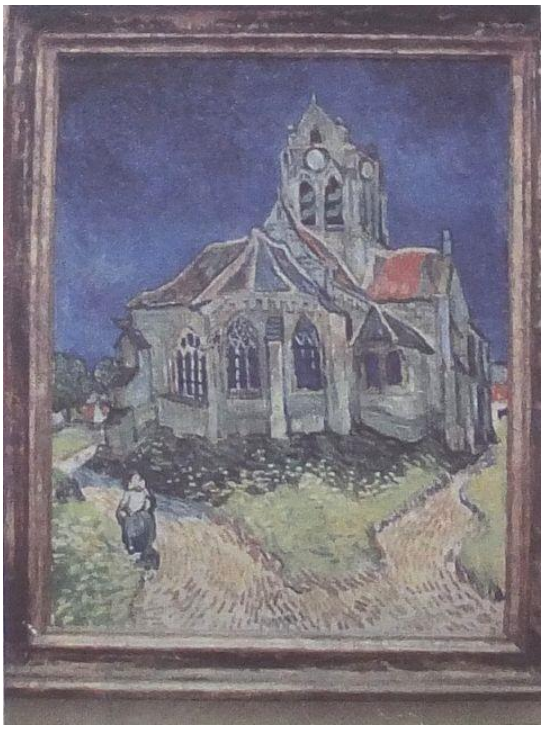
昭和 30 年 6 月、土船園舎の一部が完成し俎山園舎から、福島市土船字新林の地に移転し現在に至っている**【写真－9②】**。

【写真－9②】 青葉学園土船園舎（S30.6～） H290906

さて、このたび青葉学園土船園舎をお訪ねしたところ創設期のご苦労やその後蛇体の園舎の跡を訪ねられたことなどについて親切に教えて頂き、また各種資料提供を受け、さらに『50 年史』から写真や図版の転載のご許可を頂いたことについてお礼を申し上げます（神戸信行常務理事様）。

園内廊下等には絵画や彫刻がたくさん飾ってあって観させて貰いました。その中で驚いたのが徳永善伸画伯（奄美大島在住、福島市矢吹町出身）の「桜島」という油彩画（10号）が食堂に飾ってあったことである。**【写真－9③】【参考写真－11】**

【写真－9③】「桜島」（10 号油彩画）奄美大島・徳永善伸画伯（福島県矢吹町出身、徳永光男氏実弟）昭和 62 年。青葉学園様提供（食堂）



【参考写真－11】 ゴッホ、フィセント・ファン（1853-90）「オーヴェル＝シェル＝オワーズの聖堂、後陣」（1890 年）フランス・オルセー美術館 H121013

観ればみるほど不思議な感じのするゴッホ風の絵で、資生堂の元社長森治樹氏が激賞されていた（『50年史』238頁）。画伯は、筆者が60年近く親炙（感化をうけること）するカナモジカイ会員徳永光男先生のご実弟である**【参考写真－9④参照】**。1960年（昭和35年）頃、矢吹町の徳永先生のご実家を友人と共に何回かお訪ねしたことがあるけれども、そのおりに善伸画伯に一度だけお会いした記憶がある。帰りにサトウキビを頂いたのを覚えている（その頃既に奄美大島におられたのかもしれない）。

その後お目にかかることもなかったが徳永先生からは、奄美大島の方で絵を書いていると消息を伺っていたものである。ついで学園の資料展示室の「たんぽぽ館」も見せて頂いた。三尾砂が使用した文机やローマ字教科書等の著書類、住井すゑ（『橋のない川』著者）ら著名人からの御手紙類が陳列してあった。また、写真などと共に大きなパネルに表示されていて、何枚か撮影させて頂いき本稿にも掲載させて頂きました**【写真－9④⑤】**。

【写真－9④】　三尾砂愛用の文机や著書類（たんぽぽ館）　H290906

【写真－9⑤】　青葉学園たんぽぽ館　H290906

おわりにかえて

大滝周辺の銅鉱山についてはかねてより整理しておきたいと考えていたことであった。今回の青葉学園蛇体園舎跡地探索を契機として不十分ではあるが基本的なことについて一応の整理ができたと思っている。ただ残念なのは、特に中野鉱山についてその具体的な採掘方法というか、実際にどのような作業がおこなわれていたのかほとんど情報がなかったことである。閉山から60年を過ぎようとしている今日、情報を得ることは益々困難になってきていると思われるが機会を見つけまとめておきたいものである。

蛇体鉱山跡地については、万世大路ファンとして一度は訪れておかなければならない重要な関連遺跡とかねてより認識していたものであった。その後当該箇所が福島市土船に所在する児童養護施設社会福祉法人青葉学園の発祥の地であることを知るに及んでなおさらその感を深くしたものである。終戦前後のあの未曾有の大混乱の中、福島県の人里離れた山中の青葉学園蛇体園舎で新し日本文化を創造するという指導者三尾砂を中心とする誠にロマンに満ちたムーブメント（表現が不適切かも知れないが）がなぜ起きたのか。青葉学園については、満足できるものではないけれども自分なりにその疑問について整理してみたものである。

いずれも浅学菲才（せんがくひさい）の筆者による報告で誤認しているところや不十分なことが多々存すると思われるので諸賢のご指摘ご教授をお願いする次第です。

－　完　－